
ロリコンな俺のダラダラ生活

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコンな俺のダラダラ生活

【Nコード】

N7933T

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

タイトルは『タナトスの鎌』様より貰いました。

一応、200文字で詩などを書いていきますが、内容は皆無です。それっぽいこと書いてあるようで、実は何にも書いてないです。

というか、サブタイトルが本文です。

サブタイトルが本文です！

大事なことなので、2度言いました。 88話（ゆっくりと電波少女を膝から降ろす。）からRPG編スタートです。（ [http](http://)

p:/ncode.syoasetu.com/n7933t/8
(8)

俺は、どこにでもいる普通のロリコン高校生。（前書き）

何度も言うように、サブタイトルが本文です。

こちらには、内容は皆無です。読む必要はありません。

俺は、どこにでもいる普通のロリコン高校生。

青い空。

どこまでも高く、遥かな存在。

青い海。

どこまでも広く、深い存在。

雨の日。

いつまでも降り続きそうな、長い存在。

雪の日。

世界を白で染める、無垢な存在。

それぞれは姿を変え、それぞれは個々の存在。

一人一人は生き物なのに、一人一人は別々。

同じくくりでも、違うモノ。

立体だろうが平面だろうが、全て同じモノ。

ただ、少しの違いだけ。

その違いが、全てのモノを分け隔てている。

人は人。物は物。

存在は乱暴に扱われる。

俺は、どこにでもいる普通のロリコン高校生。（後書き）

だから、サブタイトルが本文だってば。
なんでこっちまで読んじゃうの？

そんな俺、ちよいとピンチなんだ。(前書き)

もう説明はしないよ。

そんな俺、ちょっとピンチなんだ。

腹が減る。

人は腹が減る。

だから食う。

エネルギー摂取、死なないため、味を楽しむため。

いろんな言い方がある。

人は心を持っている。

理性がある。

感情がある。

言語がある。

全く関係のないことを言っても、それっぽく聞こえる耳がある。

それっぽく聞こえる脳がある。

何が言いたいのかわからない。

それは皆、同じだろう。

馬鹿みたいな人間と、天才みたいな人間。

どちらにもいる世界こそ、馬鹿は馬鹿らしく、天才は天才らしくなれる。

そんな俺、ちよいとピンチなんだ。(後書き)

こっちを読むなんて、訳が分からないよ。

説明するとだな・・・かわいいロリさんが俺の腹の上で寝てるんだ・・・。

（前

・・・。だんだんとバカらしくなってきた・・・。

説明するとだな・・・かわいいロリさんが俺の腹の上で寝てるんだ・・・。

壊れないものは無い。

離れ離れにならない恋なんてない。

わかっていても、それを知りたくないだけ。

認知しようとしなだけ。

もし、それを悟ってしまったら、とても悲しいから。

私はそれを考えない。

彼もそれを考えない。

考えさせない。

彼の考えは、全部、私が縛っているから。

私の全ては彼の物。

彼の全ては私の物。

動かない彼を、今日も縛りつける。

昨日も縛った。

一昨日は刺した。

微笑んだまま死んだ彼は、私の事をずっと見てる。

説明するとだな・・・かわいいロリさんが俺の腹の上で寝てるんだ・・・。(後

…疲れてきた。早く本文書きたいのに。

起こそうかとも思ったが、良い匂いがあるのでそのままにしよっ。うん、そうっ

…。疲れた。

起こそうかとも思ったが、良い匂いがあるのでそのままにしよう。うん、そう

時計の秒針は動き続ける。

いつまでも、いつまでも。電池という相方が力尽きるまで、いつまでも。

相方に動かされ、人に動かされ。

時計のない部屋で、ずっと考えた。

窓の光だけが射しこむ、何もない部屋。

固く閉じられた扉。小さな窓がついている。

そこから3回出てくる食事。

殺さることなく、ただ生かされる。

死にたいとは思わない。

生かしてほしいとは思わない。

時計のない部屋で、時計の音を聞きながら。

止まることは許されない。

起こそうかとも思ったが、良い匂いがあるのでそのままにしよ。うん、そう

けっこう考えてみた。もうやめたい。

小さな頭を撫で、髪感触を楽しみ、理性と戦う。(前書き)

パトラッシュ…僕はもう疲れたんだよ…
やめてよ…噛まないでよパトラッシュ…。

小さな頭を撫で、髪感触を楽しみ、理性と戦う。

おもちゃにされただけ。

けだもの。

サイテーな奴を見下しつつ、自分の服を取り戻す。

複数の「おもちゃ」に囲まれた男。

そいつに捧げられるのは、冷たい視線と、冷たい刃物。

当然の結果。自業自得。

おもちゃにされた女の気持ちは、収まることはない。

一人は腕を切り、一人は脚を切る。

当たり前報い。

やかんが音を立て、携帯が鳴り響く。

まるで、そいつの悲鳴のように。

部屋中、血の海で染まり、腹へと最期の一撃。

浮気者の報いだ。

小さな頭を撫で、髪感触を楽しみ、理性と戦う。(後書き)

参考にしたのは、スクーデイズ。
誠は遊び過ぎたのだよ。

起こそう。このままでは俺の理性がもたない。(前書き)

やめろよ、消えちゃうじゃないか。(by カルシファ)

起こそう。このままでは俺の理性がもたない。

歌いましょう。

叫びましょう。

逃げ出しましょう。

置き去りにしましょう。

罔にしましょう。

自分だけが助かりたい。

自分だけが助かれば、それでいい。

他人は犠牲にしましょう。

他人は道具なのだから。

殺しましょう。

自分の前に立ちはだかるのなら。

隠れましょう。

ばれない為に。

嘘をつきましょう。

自分とは関係ないのだから。

忘れましょう。

そんなことは無かったのだから。

いつか、自分にもやってくるでしょう。

人生での大きな過ち。

ユサユサ揺ると、眠たそうな目を擦って起き上がる。(前書き)

考え過ぎのメッセージ。

ユサユサ揺ると、眠たそうな目を擦って起き上がる。

世の中は嘘で成り立っている。

私だって、誰だって、嘘なしでは今頃生きていない。

痛い、痛い。泣いている子供。

見て見ぬふり。

感度良好。

いつでも私のセンサーは働いている。

使うか使わないかは別として。

嘘がまかり通る世界。

にゃーにゃー泣いている子猫。

拾うか拾わないかは別。

かわいがるのか笑い叫ぶのか。

はたまた暴力を振るうのか。

限度を超えなければ、見つからなければ、それは存在しない。

嘘も、限度を超えなければいい。

腰まで伸びた艶やかな黒髪が、俺の前で舞を見せる。(前書き)

兄いちゃん、節子の書いた詩、内容めちゃくちゃねん。

腰まで伸びた艶やかな黒髪が、俺の前で舞を見せる。

ロクデナシ。

私と関わってきた、全ての人に対して。

私は私。ただそれだけ。

戸惑う言葉。

ずっと投げつけられ、罵倒された。

自分から動くことは無く、それに耐え続けた。

黒く染まった自分の心は、修正することは不可能で。

時は自然に流れる。

もし自分から動いたのなら、他人を傷つけてしまっただろう。

それくらいに私の心は荒んでいる。

黒と白がはつきりした世界で、一人閉じこもる。

誰かを壊さないように。

自分で見つけた一つの答え。

はだけた服の隙間から、見えてはいけないうものが見えそうになる。(前書き)

『実験』はこちらに移動。

はだけた服の隙間から、見えてはいけないうものが見えそうになる。

良く晴れた日曜日。

何もすることは無く、ただ無情に時は過ぎていく。

気付けば昼過ぎ。

ちびっこ草野球の賑やかな声を聞きながら、天井を見上げるだけ。

明日は月曜日。

きつと、ちびまる　ちゃんを見てる時にもう一度憂鬱な気持ちになるだろう。

どんよりした気持ち。

無気力と低気圧は混じり合って、いつそう憂鬱な気持ちを加速させる。

日は傾き、空を茜色の絵の具で染めていく。

お月様は輝き、お星様は瞬く。

明日は月曜日。

憂鬱な日。

はだけた服の隙間から、見えてはいけないうものが見えそうになる。(後書き)

今回は何も言うことないです。

慌てて視線をそらし、服の事を教える。(前書き)

奴はとんでもないものを盗んでいました。
作者のやる気です。

慌てて視線をそらし、服の事を教える。

街明かりが綺麗に映っている。

私の前身は光に包まれ、部屋へと落ちていく。

少しずつ、少しずつ死んでいく世界。

善も悪も。白も黒も。今も昔も。

誰にも止めることは出来ない。

そこにいる道化師ジエロも神も。

壊される世界を眺めることしかできない。

君の首を絞める夢を見る。

世界は確実に蝕まれる。

そんな中、最後に見せた輝き。

温かく、全てを包み込むような光。

全部なかったことに出来るような光。

蝕まれる中の切ない淡い光。

少女は聞いているのか聞いてないのか、俺の言葉を聞いていない。(前書き)

ほら、書けない…。(by ナウシカ)

少女は聞いているのか聞いてないのか、俺の言葉を聞いていない。

壊してしまいたい。

愛されないのなら。

壊してしまおう。

愛されないから。

壊してしまった。

愛されなかったから。

動くことのない屍を。

ずっと弄りながら。

壊してしまって後悔と。

壊してしまった快感と。

壊してしまった清々しさ。

全部が全部混じり合って。

何とも言えない感情を生み出す。

笑顔。

悲しみ。

哀愁。

訳のわからない部屋の中。

紫色の空気と、透明の空気が合わさって。

私の心をかき混ぜる。

赤い髪を結わい。

赤い月に告白する。

少女は聞いているのか聞いてないのか、俺の言葉を聞いていない。(後書き)

はい謎。ワケワカンナイ。

つまるところ、少女の服はどんどん捲れていくわけだ。(前書き)

40秒で書き上げな (by ドーラ 天空の城ラピュタ)

つまるところ、少女の服はどんどん捲れていくわけだ…。

もっと束縛して。

私をもっと締め上げて。

痛くなるくらいにキツク。

気持ち良くなるくらいに壊して。

私の中に、その熱い思いをぶちまけて。

行くところまでイかせてほしいの。

あなたは何も気にしないで。

全部私のワガママなの。

気持ち良くなるための、機械的動作。

打ち付ける肉音と、打ち付ける雨音。

激しく鳴り響く、2つの音。

数々の淘汰が行われ、より良い物だけが生き残る。

動作、行為、意識、自然能力。

生理的变化と心理的变化。

つまるところ、少女の服はどんどん捲れていくわけで…。(後書き)

前半、官能的。

後半、意味不明。

いつの間にか視線を少女へと戻していた俺は、最終的に服を着てない少女の姿を
書けたけど、書けてなかった！（by さつき&メイ となりのト
トロより）

いつの間にか視線を少女へと戻していた俺は、最終的に服を着てない少女の姿を

好き好き、大好き。

愛してる。愛してる。

ユリの花束をもって、大好きなあの人に告白。

校門前で待ち合わせ。

浮かれ気分で舞い上がる。

1秒が1時間に感じるほど。

世界が赤く広がっていき、辺り一面ユリの花が咲き誇る。

空気は桃色に染まり、私の肺を満たしていく。

この世は有用であり、絶対でない。

失恋した痛みは誰よりも知っている。

目覚まし時計の音が鳴り響く朝。

枯れてきた花束は床に無残に置いてある。

血塗られた包丁と共に。

いつの間にか視線を少女へと戻していた俺は、最終的に服を着てない少女の姿をクソ真面目には書かないと誓おう。
だって人気でないし。

早くも俺のソレはアレな事になっており、我慢するので精一杯だった。(前書き

書け。そなたは作者だ。(by アシタカ もののけ姫より)

早くも俺のソレはアレな事になっており、我慢するので精一杯だった。

冗談交じりで話す君。

その笑顔が眩しくて。

階段の上からそれを見下ろす私。

ただ見ることしかできない最低な私。

そんなのどうせツマラナイわ。

クルクルと世界は回って。

無理矢理にでも君と手を繋ぎたくて。

ぎゅっと体を抱きしめたくて。

そんな光景は、きっと綺麗で。

次の階段は果てしなく遠くて。

その1段を上げる勇気が無くて。

力が出なくて。

今日もただ階段から眺めるだけ。

君はいつでも元気で笑ってる。

そんな終わる世界に叫ぶ。

早くも俺のソレはアレな事になっており、我慢するので精一杯だった。(後書き

今回も意味不明。

俺はすぐに立ち上がると、前傾姿勢を保ったまま洗面所へと向かった。(前書き

見ろ！ 内容がゴミのようだ！(b y ムスカ大佐 天空の城ラピ
ユタより)

俺はすぐに立ち上がると、前傾姿勢を保ったまま洗面所へと向かった。

煙る蒸気の中、君を探し続ける。

左手に金属バットを持って。

私から遠ざかる足音だけを頼りに。

逃げられるはずがないのに。

カニバリズム。

それだけを呟きつつ君を探す。

感情制限などできない。

する意味がない。

時折、不敵で奇妙な笑い声を混ぜつつ。

時折、周りの物を壊し威嚇しながら。

追いつくことは無く、離れることは無い。

道に行き止まりは無く、途切れることは無い。

逃げ切れることは無く、捕まることは無い。

待った無しの声。

バスタオルを片手に持ち、少女の裸をちらっただけ見てそれを手渡す。

（前書き

前は何も考えなくても、書けたの。（by キキ 魔女の宅急便より）

バスタオルを片手に持ち、少女の裸をちらっただけ見てそれを手渡す。

あなたのを注いでほしい。

いつでも私に会いに来てもいいんだよ。

いつでも準備してるから。

嫌な事を全部忘れて。

私はずっと、あなたの傍にいるよ。

忘れないでね。

たとえ地球の裏側にいたとしても、必ずあなたに会いに行くから。

時間は有限なの。

朝日が昇ればサヨナラの間。

姿は見えなくなるけど、近くにいるよ。

夜になればまた会えるから。

はじける夜に、きっとまた会えるから。

それまで、私から視線を逸らさないで。

私だけ見て。

バスタオルを片手に持ち、少女の裸をちらっとだけ見てそれを手渡す。

（後書き

今回は少しだけ字数が足りなかったので、若干無理矢理に聞こえるかも。

キョトンとしている少女に、仕方なく俺がバスタオルを巻いてあげる。

（前書き

ようやく書かなければならないものができたんだ。嘘だ。

（by ハウル ハウルの動く城より）

キョトンとしている少女に、仕方なく俺がバスタオルを巻いてあげる。

何を期待しているの？

私に期待しても何もない。

何が楽しいの？

私は何もしていない。

何で見てるの？

私はおかしくない。

何が見たいの？

私は期待答えない。

何が怖いの？

私は怖くない。

何の夢を見ているの？

私は夢は見れない。

何で泣いているの？

私は悲しい事なんてない。

何を食べているの？

私は何も食べられない。

何を聞いているの？

私は何も喋ってない。

何を喜んでいるの？

私は喜びを知らない。

何を言っているの？

私は何も知らない。

少女の視線は俺のテントに向いていたが、気にしたら負けだ。(前書き)

ポニョ、純愛、きらい！(by ポニョ 崖の上のポニョ)

少女の視線は俺のテントに向いていたが、気にしたら負けだ。

嘘ついたら針千本。

昔々に約束した思い出。

ずっと忘れていた。

汚い擦れた声で君を呼ぶ。

君の目に映る物は、全部憎く見える。

その目に私は映らないから。

指切りだった。

それなのにあなたが破るから。

夢の中に落としてあげる。

ぼやけていく君の姿。

カケラは散らばっていく。

再び集めることはしない。

目に涙を溜めて叫ぶ。

嬉しみの叫び。

ポケットの中には重量のある狂気。

境目のない世界で生きる私。

ずっとこのままなのだろうか。

少女の視線は俺のテントに向いていたが、気にしたら負けだ。（後書き）

ポニョ見たことない。見たいと思わない。不思議。

巻いてすぐ離れると、少女はこちらに近寄ってくる。(前書き)

お前に作者を救えるか！(by モロ ものけ姫)

巻いてすぐ離れると、少女はこちらに近寄ってくる。

残ったのは私の感情だけ。

一人ぼっちの君。

いつでも一人の君。

私だけが唯一の仲間。

体は勝手に動き、口を開かせる。

体が燃えるように熱くなつて、顔が赤く染まる。

初めて使った言葉。

返事を貰える時間が、異常に長い。

時が止まった感覚。

いつまでたっても動き出さない。

世界が暗転して、心臓が止まりそうになる。

その世界に黄色の光が射しこむ。

時が壊れだした。

顔の赤みが極限まで増していく。

学校帰りの道には2つの影ができた。

巻いてすぐ離れると、少女はこちらに近寄ってくる。
(後書き)

純愛は好きじゃないのに、書けちゃった？

まるで子猫みたいに擦り寄ってくる。(前書き)

ここで書かせてください！(by 千尋 千と千尋の神隠しより)

まるで子猫みたいに擦り寄ってくる。

暗い世界の中で何かが光った。

光が射さない世界で何かが光った。

楽園を壊す光が射した。

何をかも壊す光が射した。

その光は世界を創った。

感じたこともない世界が、そこにできた。

火と水とが混じり合う世界が出来た。

生物は無く光が支配する世界。

漆黒の光と純白の光。

この2つは混じることは無く。

世界を2つに分けた。

そこから始める世界崩壊。

創って壊され創っては壊される。

それならいつそ存在しない方が良い。

私はまた壊す。

だんだんと我慢の限界に近づいていく。(前書き)

才能を解き放て！ 作者は馬鹿だぞ！(by アシタカ もののけ
姫より)

だんだんと我慢の限界に近づいていく。

青い月。

黄色い海。

茶色の空。

水色の地面。

黒い世界と白い世界。

人類は絶滅し、植物だけの世界。

赤や紫、黒。

色とりどりの植物が動き回る。

鉄くずは転がりまわり。

血肉は変色し。

世界の色を変えて。

いつまでも存在はしない。

混沌と秩序は入り乱れ。

豆から目は出て。

腐って消えていく。

返すものはない。

せつなく消えていく。

より良い創作のために。

返信も送信もできない。

しがらみだけに囚われ。

てんはしに。

よくは生き返っていく。

だんだんと我慢の限界に近づいていく。(後書き)

豆腐返せよ返してよ

いつもここで目が覚める。(前書き)

あなたは来たところへ帰った方がいいよ。あなたが求めている作品は、作者にはぜったい書けない。

(by 千尋 千と千尋の神隠しより)

いつもここで目が覚める。

真夏の暑い太陽。

鞆を背負って歩く制服姿の2人。

汗を流しつつ、談笑を営む。

先を見ると、世界が揺らんで見える。

1人は荷物が2つ乗っている自転車を押し、1人は手ぶら。

自動車の排気ガスと騒音の世界。

セミはうるさく鳴き、騒音に混じる。

雲1つ無い快晴。

カラリとした空気が2人を包み込む。

小さな用水の水は干上がっている。

笑い話は弾み、暑さを忘れさせてくれる。

日は頭上にある。

学校からの帰り道。

ここから先は自由時間。

いつもここで目が覚める。（後書き）

なんかこう、清々しさを出してみた。
ハクの本名、ニギハヤミコハクヌシ。ふと、頭の中から出てきました。

1ヶ月に必ず1回は見る不思議な夢。(前書き)

親方！空からネタが！（天空の城ラピュタより）

1ヶ月に必ず1回は見る不思議な夢。

やることがない。

することがない。

やりたいこともない。

したいと思わない。

階段を上ったり下ったり。

上下左右に動くだけ。

宝物を見つけ。

使うこともなく。

錆びて無くなり。

曇り空の下で、ただ歩くだけ。

太陽と月は同時に存在し。

光と闇は存在しない。

何もない真っ白な世界で、ただ1人歩き続け。

水が流れる音だけ聞こえ。

水は存在しない。

言語も感情もない世界。

かつこよさも美人もない。

眠たい目を無理やり開け。

5年間いるだけ。

1ヶ月に必ず1回は見る不思議な夢。(後書き)

この作品、図書室で書いてるんですが、近くでリア充たちが会話をしました。

後半はネタにつまったんで、適当に使える言葉を打ってたらこうなりました。

目を開けてそこに見えるのは、男の独特な生活感だけ。（前書き）

新しい小説に力入れていたら、こっちが疎かに…。

目を開けてそこに見えるのは、男の独特な生活感だけ。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

もうしません。

もうしません。

私は悪くない。

私は悪くない。

何もしてないのに。

全部私のせいにされた。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

謝っても謝っても許してもらえない。

泣き叫んでも許してもらえない。

もうしませんから。

ごめんなさい許してください。

私は何も悪くないのに。

やがて喉が潰れ。

声を失った。

それでもまだ許してくれない。

ごめんなさい。

私じゃない。

もうしません。

私は何もしてないの。

目を開けてそこに見えるのは、男の独特な生活感だけ。（後書き）

製作時間5分ぐらい。

一人きりの部屋で、まだ起き上がれずにいた。(前書き)

前回の続きみたいな感じで。

一人きりの部屋で、まだ起き上がれずにいた。

誰もいない。

誰も呼べない。

誰も来ない。

喉が渴いても、お腹が減っても。

誰も来ない。

誰も私に気付かない。

気付こうとしない。

朝でも昼でも夜でも。

ずっと私は一人きり。

流す涙もなくて。

脚には力が入らなくなる。

目の前の物はかすんで見えて。

誰もがみんな無視をする。

最後に口に出した言葉はなんだっただろうか。

遠い昔の記憶を思い出すかのように。

私はずっと悶え続ける。

喉が渴いた。

お腹が減った。

みんなが皆、私を無視する。

一人きりの部屋で、まだ起き上がれずにいた。(後書き)

製作時間4分。

これから大学に行ってきます。

この夢から覚めたときは、決まって疲労感に襲われる。(前書き)

ネタがない！ もう知らない！(by さつき となりのトトロより)

この夢から覚めたときは、決まって疲労感に襲われる。

言わないで。

まだ言ってほしくない。

気が狂いそう。

羽のように軽いこの体が飛んでしまいそう。

我慢して、我慢し続ける。

強い風が吹いたらいなくなってしまう。

雨が降ったら落ちてしまう。

僅かな時間でも見失ったら消えてしまう。

雲に隠れて見えなくなってしまう。

霧に隠れて見えなくなってしまう。

言葉にしないで。

私を見ないで。

すぐに消えてしまう私なんかよりも、もっと見るものがあるはずだから。

現実を見つめ直してあげてね。

この夢から覚めたときは、決まって疲労感に襲われる。（後書き）

Dark Blue やり終わってしまった…。体験版だけど。
製品版が欲しくなった…。千堂姉妹のルートやってみたい。

力のない足で無理やり立ち上がり、洗面所へ向かう。(前書き)

3分間待つてやる！ 50秒後 時間だ！ 答えを聞こう！(詩
の感想的な意味で)

b y ムス力大佐 天空の城ラピュタより

力のない足で無理やり立ち上がり、洗面所へ向かう。

聞こえますか？

私の事が見えますか？

君の夜に会いに行きます。

君の心を守るために。

死にたいなんて思わずに。

月が赤くなる夜に、そちら行きます。

私は誰にも見えない。

でも伝えたいよ。

君の事は大好きだと。

君の名さえ知らないけど。

明日も今日もずっと見ていたんだよ。

笑っている君が好き。

虹色に輝いて見える君が好き。

いつの日にかまたその笑顔が見たいから。

私は戦うことをやめない。

そのために今、言っておきたい。

さよなら。

力のない足で無理やり立ち上がり、洗面所へ向かう。(後書き)

飲み物：アスパラドリンク、コーラ、アクエリアスを混ぜたもの。

冷たい水で顔を洗うと、曇っていた頭の中が快晴へと変わる。（前書き）

（作者の脳内が）腐ってやがる。 b y クロトワ 風の谷のナウ
シカより

冷たい水で顔を洗うと、曇っていた頭の中が快晴へと変わる。

宙に浮いていく涙。

流星の星空が闇に覆われるとき。

この世界の救世主が現れるだろう。

2人で一緒に。

奇跡は起こるよ。

何度だって。

魂のルフラ（ry

赤い空の向こう側からやってくる。

高い崖の上から。

何度だって立ち上がる。

長い長い夜が明けたとき。

世界は壊れる。

魔法の言葉。

茨の道が焼けるとき。

悪霊が世の中を徘徊する。

粉のように白い雪が積もり。

だって世界はクレイジー。

壊れていく世界を笑いながら見る。

救世主はいない。

冷たい水で顔を洗うと、曇っていた頭の中が快晴へと変わる。（後書き）

完全なネタ回。

冷蔵庫の中を漁り、何か食い物を探す。（前書き）

きれいなネタとオチでは作者がやる気を出さないんです。

by ナウシカ 風の谷のナウシカより

冷蔵庫の中を漁り、何か食い物を探す。

もっと奥の奥まで熱くして。

だんだんと理性を溶かして。

あなたなら不可能じゃないわ。

簡単でしょ？

大きなあなたのモノ、大好きよ。

どうしよう。

高く振り上げたこの腰。

月一のこの行為。

真っ直ぐに駆け上がっていく私の衝動。

今はわからなくてもいい。

どんな体位でも構わない。

もっと強く。

どこまでも未来を見続けて。

飛行機雲が流れていく空を眺め。

指を啜えてあなたを見つめる。

見過ごしてきた季節。

2人で叫びたい。

枯れるまで。

・・・きれいさっぱり、驚くくらい何も入ってない。(前書き)

ジブリ名言は力尽きました。

・・・きれいさっぱり、驚くくらい何も入ってない。

お疲れ様。

まん丸なお月様がゆつくりと動き。

小汚い空気がグルグル回る。

短剣を振り回して暗闇を走る。

死神が追いかける闇の中で必死に逃げる。

体中に傷が出来る。

逃げても逃げても終わらないゲーム。

死神は誘うのをやめない。

私は逃げるのをやめない。

徐々に追いつかれる足音。

もう疲れたよ。

すごく眠いよ。

もう終わってもいいよね。

どうせ私なんて。

足音が早く近づいてくる。

足を止めて振り向く。

見えない黒い死神。

ありがとう。

・・・きれいさっぱり、驚くくらい何も入ってない。(後書き)

小説ばかり書いてたので、どうしても小説口調に。

仕方なくダルい気持ちを抑えて、買い出しに出かける。(前書き)

尖角の今日の図書室での発言。

「お(未成年には不適切な発言のため削除)」

仕方なくダルい気持ちを抑えて、買い出しに出かける。(後書き)

皿完成。

文句があるなら見なくていいです。

嫌になる暑さの中、自転車を漕ぐ。（前書き）

同日、尖角の発言。

「パイパ（未成年に対して不適切な発言のため、閲覧削除）」

嫌になる暑さの中、自転車を漕ぐ。

私の中に夏が来る。

どこかのリゾートみたいな常夏の恋。

淡い紫色の恋。

相手は気付いていない。

秘密の恋。

あの人は振り向いてくれない。

空は深く青く。

私の心の赤を紫にする。

相手には黄色の相手。

私の恋の邪魔をする。

溜息しか出ない。

場の雰囲気がどんどん暗くなり。

明日も待ち続ける。

明日も、たぶん、またこの気持ちが続くだろう。

やらなければいけないことがある。

何か気分が変わることは無いだろうか。

私は人生の底に着いた。

嫌になる暑さの中、自転車を漕ぐ。(後書き)

少し離れた所の3人組の会話を盗んでやった。
もう書くことない。

そして途中で気が付く。
(前書き)

もうネタがないぜ。
本文も皿も。

そして途中で気が付く。

私を忘れないで。

ずっとあなたのために尽くしてきたんだから。

生まれた時からあなたを愛していたんだから。

この思いが伝えられなくて悶え苦しむ。

現実には真実だけを映し出す。

身を抉るような激痛。

いつその体を壊してしまいたい。

生まれ変われるのなら、あなたの近くに存在できるものに。

絶えて消えない欲に身を委ね。

完全なるあなたの器になりたい。

それならば私の躰なんて壊れてしまっていていい。

細く華奢な体が血で染まっていく。

そして途中で気が付く。（後書き）

曲聞きながらやると、製作時間が全然違う。5倍は早く書ける。
水銀燈の今宵もアンニユイ

財布を家に置きっぱなしだということに。
(前書き)

ジブリの名言はどうだったのだろうか？
受けは良かったのだろうか？

財布を家に置きっぱなしだということに。

校内を走り回る学生。

椅子に座って友達と話し込む学生。

自販機でジュースと買う学生。

一人でパソコンを触る学生。

図書室でパソコンを触る学生。

高所恐怖症の学生をビビらせる学生。

長椅子に横になる学生。

当てもなく歩き回る学生。

サークルのイラストを見ている学生。

ただぼんやりと外を眺めている学生。

トランプで遊んでいる学生。

ゲームを持ってきて遊んでいる学生。

死んだ魚のような目で詩を書いている学生。

1時間30分の退屈。

財布を家に置きっぱなしだといつことだ。(後書き)

何となく、大学の中の風景。

・・・このサ エさんだよ・・・まったく。(前書き)

デッドマン・ワンダーランド、よんでますよアザゼルさん。
この2つ好きです。

・・・どうのサ エさんだよ・・・まったく。

もし私が魔法使いなら。

私を苛める奴を血祭り。

私に逆らう奴を皆殺し。

大きな声で叫ぶんだ。

空にまで響く声で高笑いをする。

誰も私に逆らえない。

私が望む最高の世界。

動かない死体と、遊んで、踊って、歌う。

パパ、ママ、先生。

飛んで走って回って。

火山の1つや2つ簡単に噴火させれる。

とっても、とっても素敵。

嫌なものなど存在しない。

はしゃいで、叫んで、壊して。

そのうち誰もいなくなつて。

私の願い事は遙か彼方に消える。

ぶつくと文句を言いながら、家へと戻る。（前書き）

図書室でヘッドホンを借り、音楽を聴きつつ執筆。

ぶつくさと文句を言いながら、家へと戻る。

細く伸びた手足。

弱弱しい声。

すぐにでも消えそうな命の火。

絡み合う体。

許されないと知りつつも燃え上がる。

キスをして。

もつと必要とされたい。

おかしいと思うのが、どうしようもなく好きになる。

おかしさなんて感じる暇なんてないのに。

触れてからは戻れない。

夜の闇に溶けていく。

夜明けなんて来なければいいのに。

あなたをずっと抱いていた。

魅惑の時間が流れていく。

触れていて戻りたくない。

あなたさえあればそれでいい。

ぶつくと文句を言いながら、家へと戻る。（後書き）

このヘッドホン使いにくいアルよ。

その時、ある1つの考えが俺の足をとめた。(前書き)

ミスのフレンチクーラー大好きです。

その時、ある1つの考えが俺の足をとめた。

世界はクルクルまわる。

甘い甘いお菓子。

マシュマロ、キャンディ、ドーナツ。

甘い甘い蜂蜜をかけて。

わたあめ、羊羹、大福。

甘い甘い世界。

シュークリーム、ケーキ、エクレア。

全部一人で食べつくす。

お菓子でできた家。

食べ過ぎて崩れていく。

甘い甘い世界の世界征服。

私のお菓子の世界征服。

真っ赤、真っ赤なお菓子で世界征服。

お菓子の家はなくなった。

空から降るハニーシロップ。

私の世界を金色に染める。

ベタベタの私は笑う。

その時、ある1つの考えが俺の足をとめた。（後書き）

最近、地下鉄で高校時代の友人を見かけるが、声をかけれない。

食べ物を買に行くんじゃない、食べに行けばいいじゃないか。(前書き)

天気がいいのに外に出ず、詩なんて書いてる作者。

食べ物を買に行くんじゃない、食べに行けばいいじゃないか。

真っ白な記憶が溶けていく。

いつまで眠り続けるの。

オイルが切れた機械のように動かない。

周りには泣き出しそうな人がたくさん囲んでいる。

真っ白な記憶を投げ出したら楽になれるだろうか。

窓ガラスが砕け散り唇を切る。

真っ青な海の底に沈んでいたら楽しい夢が見れるのだろうか。

焼けつくような砂漠の中で彷徨い続けたら白い記憶は消えるのだろうか。

夢の中で歯車は噛み合っていく。

溶けだした黒い世界は透明へと変わっていく。

食べ物を買に行くんじゃないか、食べに行けばいいじゃないか。(後書き)

『【鏡音リン】炉心融解とDon't say "lazy"を混ぜてみた【けいおん!】』
作者のオススメ。

自宅の方向とは逆方向を向き、ある場所へと向かう。(前書き)

腹減った…。

これくらいしか言うことないです、はい。

自宅の方向とは逆方向を向き、ある場所へと向かう。

左から右へと、あなたの言葉が流れていく。

別にそんな気ないのに。

私が好きな人は、もっと他にいるのに。

朝から聞きたくもない言葉を、うんざりするほど聞かされる。

いつでも愛してる。

忘れられないから、彼の事。

いつそのこと上書きしてしまえばいいのだろうか。

私の誕生日はまだ当分先。

それでも信じている。

私の大切なメモリーは消えることなく。

私の思い通りにはいかない。

出来事は流れ続け私の知らない間に時間は過ぎていく。

5分後、たどり着いたのは友人の家。（前書き）

本日5話目？

5分後、たどり着いたのは友人の家。

揺れて振れる気持ち。

いつまでも愛していたかった。

この切ない気持ちをどこにやればいい。

抱かれて、さらに燃える気持ち。

行く当てのない私の心は、傷つき、細く、千切れそうだった。

世界が廻るにつれて、私の心も廻っていた。

2人で一緒に夜を共にし、明日の事を話し合った。

昔にいた人の事は忘れた。

今だけを生きていればいいと、そういう考えになった。

激しい愛に包まれて、あなたの事しか考えにさせられた。

私だけを見つめて。

インターホンを連打して、無理やり友人を出させる。(前書き)

昼飯を食べ、詩の執筆再開。

インターホンを連打して、無理やり友人を出させる。

相手の頭を掴んで、強制的にこっちを向かせる。

貴方の事は関係ないの。

全ては私の問題だから。

貴方の友達には私だけ。

他の人なんていらないの。

ずっと私だけを見ていて。

その目は、私だけを見るための目なの。

何も心配はいらない。

どうしたの。

なんで泣いているの。

私の方が悲しいんだよ。

私を見てくれないから。

仕方なくこうしてるんだよ。

血を見るのは、あと少しだけだからね。

あと少しで楽しくなれるよ。

だから少し我慢しててね。

インターホンを連打して、無理やり友人を出させる。（後書き）

詩、飽きてきた。

小説書きたい。

ちょうど1年前の今日、作者が初めて小説を投稿した日です。

しばらくすると、気怠そうな友人がゆっくりと出てきた。(前書き)

黄帝液ってのを飲んだけど、どっという効果があるの？

しばらくすると、気怠そうな友人がゆっくりと出てきた。

私の心を作る秘密の工場。

作り出された心は、外に出され、消えていく。

寂しそうな心。

怒りの心。

悲しみの心。

喜びの心。

人前に出では消えていく。

工場に休みはなく、年中動いている。

原料はいらない。

私の意志とは無関係に動き続ける。

偽りの感情は、私の感情を覆う。

本当の心は、いつでもも見せない。

ミスはしない。

完璧な工場。

日常の中、偽りで埋まる。

忘れていたものは、永遠に忘れ去られ、二度と姿を見せない。

私の秘密の工場。

しばらくすると、気怠そうな友人がゆっくりと出てきた。(後書き)

俺の400円を返せ。

やっぱり元気な奴が飲んでも無駄なのか。

そして、ゆっくりと扉を閉めていった。**（前書き）**

ペイントソフト面白い！

前のクソパソコンのとは大違いだ。

そして、ゆつくりと扉を閉めていった。

真っ青真っ青、私がまわる。

黄色い雲を突き破り。

緑色の樹海に人形ひとがたを捨てる。

橙色の海を蒸発させ。

紫色の空を地面と混ぜて。

赤色の頭を投げつけて。

茶色い足を切り刻む。

黒色の髪を噛み砕いて紙と共に神に捧げる。

黄緑色の月が昇り。

黄金色の鳴き声がする。

銀色の羽が空を舞う時。

土色の光が射す。

群青色の朝と同時に。

朱色の生物が湧いて出る。

空色の闇によつて、それらは消える。

真っ白な私が、ただ存在できる世界。

そして、ゆつくりと扉を閉めていった。**（後書き）**

お題は「色」

それ以外は考えてない。

完全に閉まる前に、俺の手が邪魔をして、強引に中に入る。（前書き）

ルビを読む詩。

漢字は全く関係ないです。

完全に閉まる前に、俺の手が邪魔をして、強引に中に入る。

金荒唐無稽科
わたしはたびをする

軽森赤羅桂
どこにいくのか

黒馬万跳満
なにをするのか

象拳妄動
なにをしたいのか

玉条当意泰
わからない

然自方師
ながされるだけ

頭蛇尾若即博
あてもない

倍満覧勇
なにもできない

往邁進強竜
さがらうことなく

薬運剂
みをまかせ

漢記妙明鏡
さがらうことなく

厚屋槍生顔無
みをゆだね

役満恥止水
かぜのあとに

天和順風般
みみをかたむけ

君謎脚
そらにまう

完全に閉まる前に、俺の手が邪魔をして、強引に中に入る。（後書き）

適当な四字熟語を集め、並び替えたもの。
実は麻雀用語が4つ隠れてます。

友人が嬉しそうな（困った）顔をしていたので、文句はないだろう。（前書き）

新小説も書かず、詩も飽きてきた。

友人が嬉しそうな（困った）顔をしていたので、文句はないだろう。

私を幸せな気持ちにさせてくれるのは、これだけ。

これだけのために、私は何だってできる。

どれだけの苦難であろうと、これのためなら。

どれだけの時間がかかろうと、これのためなら。

どれだけ危険な仕事であろうと、これのためなら。

私はいつも、これによって生かされている。

暗い闇の中でしか生きられない。

外の明るい世界では、きつとすぐに死んでしまう。

だが、忘れないでほしい。

闇で動く物があるから、明るい所で動ける事を。

友人が嬉しそうな（困った）顔をしていたので、文句はないだろう。（後書き）

最近、脱麻（脱衣麻雀）にハマリ気味。

タンヤオ、七対子、三暗刻しかわからないので、それ以外は自動でやってもらってます。

汚い部屋だな、と思いつつ台所へ向かう。(前書き)

未だ(脱衣)麻雀にハマってます。

汚い部屋だな、と思いつつ台所へ向かう。

甘い吐息をかけた。

あなたの息と絡めたの。

間近に顔が迫っていた。

唇までの距離がくっつくくらいに近かった。

飛び出るほどに波打った心臓。

唾液の混ざる音が聞こえた。

顔が離れてた。

笑ったようなあなた。

夜空に浮かんでいる月を眺め。

苦い溜息を1つ。

黙ったままの1つの空気。

冷たい涙が流れる。

言葉では表せない感情。

でも、忘れてはいない。

窓辺に涼しげな風が吹き付ける。

カーテンが微笑む。

あなたはその人と歩んでいくのね。

汚い部屋だな、と思いつつ台所へ向かう。(後書き)

参考曲は『mint tears』

ハクには勝ったんで、次はミクに勝ってきます。

冷蔵庫の中を、有無を言わせずに漁る。(前書き)

麻雀のイライラを詩に。

冷蔵庫の中を、有無を言わずに漁る。

誰かを殴ってしまいたい。

鼻の骨が砕けるまで殴りたい。

血を吹きだして、倒れていく姿を見たい。

呻き苦しむ声が聞きたい。

刃向う力もなく、死んでいく姿を見たい。

刃物で腹を捌きたい。

内臓が飛び出るところを見たい。

何もできずに死んでいく様を見たい。

脳をかち割って、脳みそを取り出してみたい。

髪の毛を引き千切って、丸焼きにしたい。

目玉を抉りだして、潰したい。

喉を切って、叫べないようにしたい。

私の怒りを誰か沈めて。

冷蔵庫の中を、有無を言わずに漁る。(後書き)

国士無双が出来ないイライラを現した。
無謀なことなど、百も承知。

いつもの事なので、友人は怒らないし抵抗もしない。(前書き)

縦読みで麻雀用語。

いつもの事なので、友人は怒らないし抵抗もしない。

跳びはねるほどの快楽を。

満ち足りないことは無い。

倍増していく感度を、極限まで高めてあげる。

満足はさせない。

七つの心を全て壊して。

対になる私の心を全てあげる。

子供みたいに甘えて。

天にも昇るような感じに。

和める時間はない。

三秒たりとも休ませない。

暗い闇の中。

刻一刻と近寄る有限の時間の中で。

四つだけあなたに言った。

暗いところには近寄るな。

刻^{とき}の鳴る場所には近寄るな。

地面に障るな。

和みを捨てろ、と。

いつもの事なので、友人は怒らないし抵抗もしない。(後書き)

地味に難しかった…。役に数字が多すぎる。

すぐに食べれそうな物だけを盗り、朝食をいただく。（前書き）

友人に「卑猥な発言自重」的な事を言われたので、これからはもっと紳士度を上げていきます。

すぐに食べれそうな物だけを盗り、朝食をいただく。

そんな短いじゃ足りないの。

帽子もコートも被った、そんなあなたじゃ。

私とあなたじゃ釣り合わない。

誰が見ても笑う。

あなたがいけないの。

無理やりにでも変えてみせる。

それが私にできる最後の愛。

場所なんて構わない。

ムードなんて気にしない。

あなたを変える。

それだけが私の目標。

それだけのために生きる。

誰が見ていたって、誰が覗いていたって、誰が笑ったって。

他人はどうでもいい。

私とあなた、
2つが1つになるならば。

すぐに食べれそうな物だけを盗り、朝食をいただく。（後書き）

非公開にしてるはずの小説に、なぜかほぼ毎日1アクセス。
誰なの？ 不思議。

あれは作者がレイアウト実験にしてるのに。

ベッドに座って、こちらを遠い目で眺めている友人。(前書き)

今日はまだ上げてないことを、今、思い出す作者。

ベッドに座って、こちらを遠い目で眺めている友人。

涼しく、快適な室内。

暑く、焼けるような室外。

その室外で、大勢の人が助けを求めている。

部屋の中に入れてくれと叫んでいる。

生憎、この部屋は私だけの部屋。

誰にも入れさせない。

他に部屋はない。

狂ったような外の人間は、実力行使。

でも、部屋の戸は絶対に開けられない。

言葉になってない叫び声を上げる者。

口から血を吐く者。

血だらけの手で、それでも必死に部屋の戸を壊そうとする者。

私はそれを見て、ただ高笑いをするだけ。

ベッドに座って、こちらを遠い目で眺めている友人。(後書き)

エアコン様が快適すぎて困る(笑)

え？扇風機？ ああ、そんな奴もいたね。

お構いなしに飯を食い続ける俺。(前書き)

ついに50話超えた。

つまり、10,000文字超え。

お構いなしに飯を食い続ける俺。

死んだような声。

死んだような顔。

死んだような体。

死んだような音色。

死んだような世界観。

狂った私。

狂った叫び。

狂った視界。

狂った腕。

狂った響き。

曇った心。

曇った窓。

曇った煙突。

曇った紙。

塗りつぶされた時計。

塗りつぶされた足。

塗りつぶされた道。

塗りつぶされた太陽。

塗りつぶされた金属。

塗りつぶされた耳。

塗りつぶされた看板。

光り続けるネオン。

光り続ける星。

光り続ける月。

光り続ける信号。

狂った私が見たモノ。

お構いなしに飯を食い続ける俺。(後書き)

内容に意味はない。

思い浮かんだモノを適当に打っただけ。

次はエロいの書きます。

全部食べ終わったところで、ようやく友人の第一声。(前書き)

足が痛い。

7? (2時間) は歩きすぎたか…?

全部食べ終わったところで、ようやく友人の第一声。

下半身に突き刺さる棒。

ソレは私の良い場所を知っている。

自ら動き、相手も誘惑する。

攻守が逆転した体勢。

鳴り響く音はとても淫ら。

上下に揺れる、2つのもの。

髪も乱れて揺れる。

軋む音も私たちを加速させる。

肉と肉がぶつかり合う行為。

何回イかせても、私は止めてあげない。

満足するまで搾り取って、枯れ果てさせてあげる。

私の体液に一度でも触れれば、二度と逃げれない。

最後の、最後の一滴まで、出し尽くして殺してあげる。

全部食べ終わったところで、ようやく友人の第一声。（後書き）

途中からサキユバス設定を練り込んだ。
理由は聞くな。聞かないでください。

冷たい声で「帰れお前」の一言。(前書き)

1日1話以上上げるのキツイ。
ネタないし。

冷たい声で「帰れお前」の一言。

布の切れ目から見える、白い皮膚。

腰まで伸びた、艶やかな銀色の髪。

考えを読まれそうな、水色の瞳。

人形のように細い手足。

時折見える白い下着。

目と同じ色のネイル。

サンダルで気怠そうに歩く姿。

無い胸は揺れない。

中学生ほどしかない身長。

いつもはサバサバ、でもうやる時は、きちんと面倒を見てくれる。

9割がクール、1割でデレる。

そんな比率。

死体に動じもせず、淡泊な表情で返り血を浴びる。

いつでも俺を守ってくれる。

冷たい声で「帰れお前」の一言。（後書き）

作者が好きなタイプ。ただ理想を捻じ込んだだけ。
クールなキャラ最高。

まったく、俺の友人は・・・ツンデレなんだから、もう。(前書き)

『取扱注意彼女』をあげました。
よければそちらも読んであげてください。

まったく、俺の友人は・・・ツンデレなんだから、もう。

何も無いようで、何もかもがある世界。

何も見えないようで、全てが見える世界。

暑いようで、想像よりはるかに暑い世界。

寒いようで、実は温度なんて無い世界。

色がないようで、実は自分自身に色がある世界。

眠たいと思えば、いつだって寝れるのに。

起きたいと思っても、それは自由にはできない。

矛盾が起こる世界で矛盾が起こらない。

死にたいなら死ねばいい。

殺したいなら殺せばいい。

自由のない世界で、人は永遠には自由でない。

まったく、俺の友人は・・・ツンデレなんだから、もう。(後書き)

意味不明。

1日1話&作品発表がしくて、無理やり書きました。
ただいま、また新たに新小説を書き初めてます。

家に帰ってもすることがないので、しばらくここで暇を潰すことにしよう。(註)

風呂に入っていると急に思い浮かんだ言葉を入れてみた。

家に帰ってもすることがないので、しばらくここで暇を潰すことにしよう。

月明かりに照らされ、静かに跳ねる水面。

まるで1つの生き物のよう。

優しく光る滴は、全ての時間が止まっているかのよう。

周りの木々は、それを眺めているように囲っている。

水面に映った月は、滴の母親のよう。

月の明かりが増すと、滴も優しさと強さを増す。

月に雲がかかり、光を失う。

輝いていた滴も、うなだれる様に、元の色へと戻る。

頂上までたどり着いたとき、光は存在しない。

煌びやかに上がった滴は、いずれ水面に落ちる。

家に帰ってもすることがないので、しばらくここで暇を潰すことにしよう。

（後

作者が書いた13作品のうち4作品が残酷描写あり、という事が判明。

狂気的な小説を上げ始めたので、それ苦手な人のための非常口みたいな詩。

知らぬ間にゲームに参加してる友人。ほらツンデレだ。(前書き)

本文の話をどこに持っていこうか…。

知らぬ間にゲームに参加してる友人。ほらツンデレだ。

サイレンが鳴る。

頭の中の警告音が鳴る。

それに触れるなど注意を促す。

やってはいけない禁忌。

ほんの興味本位。

人間的満足感。

人間的背徳感。

それに酔いしれ、いつしか元には戻れなくなった。

それでも後悔はしない。

むしろ、このほうが良かったのではないかと思う。

あのままの自分ではいけなかったのではないか。

殻が破れた自分を見て昔の自分を苛めなくなる。

よいのではないか。

自分が良ければ、他人が良ければ、何もしくとも。

知らぬ間にゲームに参加してる友人。ほらツンデレだ。（後書き）

最近、クラッシュバンディクーにはまっています。

昼過ぎまでゲームを楽しんだ俺たちは、買い物へと出かけた。(前書き)

尖角曰く

「普通の詩」パンツが食い込んだ詩」

昼過ぎまでゲームを楽しんだ俺たちは、買い物へと出かけた。

ふと、歩きづらくなる。

確かに外は暑く、歩きたくはない。

焼けるような皮膚の感覚が、さらに歩く気を失くす。

蝉の鳴き声がうるさく鳴り響く。

そんな中覚えた違和感。

足の違和感とはまた違った歩きづらさ。

徐々にそれは大きくなっていく。

歩けば歩くほど、不快感。

汗で濡れた全身に、また別の汗が流れる。

下半身の違和感は、もう限界値まで達していた。

人前であろうと、もはや関係ない。

俺は、食い込んだパンツを気持ちよく直した。

昼過ぎまでゲームを楽しんだ俺たちは、買い物へと出かけた。(後書き)

これ詩じゃないよね。

俺の昼飯兼晩飯のために。(前書き)

眠い中執筆。

GOSICKと神のみを見るので、寝れない。

俺の昼飯兼晩飯のために。

『現実是非情である』

それを言つと、どこかへ行つて…。

日は落ちていき、茜色の空は暗くなり始めていた。

小さいテーブルには4つのおかずとご飯が並べられる。

心が病んでいたのだろうか。

窓を開けると、気持ちのいい風が吹いていた。

電話が鳴り響く。出たくない。

口も言葉も勝手に。あの時と同じ事を言っている…。

『君は幽霊？』

誰も突っ込まない。

俺はまた家へと歩を進めた。

またこの声。

あなたが今いる世界は本当に現実ですか？

俺の昼飯兼晩飯のために。（後書き）

自分が書いた小説の1文を抜き出して、張り付けただけ。
小説は適当に選んだので、何使ったか覚えてないです。

若干の汗をかきながら帰宅。友人の家に。（前書き）

図書室快適。

若干の汗をかきながら帰宅。友人の家に。

賑やかな人の声。

嘲笑う人の心。

金で成り立つ人間関係。

砂の上に建つ、今にも倒れそうな立派な城。

机の上に置き去りにされた本。

乱雑に扱われた備品。

全角の人間と半角の人間。

どこかに行ってしまった人の群れ。

数字がゼロの世界で、怒られる人たち。

人間管理が出来ない社会で、除け者にされる物。

ゾロゾロと出ていく物。

2人寄り添い、周りの目を気にしない、モノ。

3人集まり、何の考えもなく、ただそこにいる者。

全部見ていた。

若干の汗をかきながら帰宅。友人の家に。（後書き）

特になし。

意味もなし。

その後も、友人とゲーム三昧。帰る気なし。（前書き）

笑える詩って一体…。

その後も、友人とゲーム三昧。帰る気なし。

有限の時間。

半分以上怠惰。

1割の努力。

残りの無駄。

することは、無くはない。

したいことも、無くはない。

やりたくないこと。

無いのいいが、あるのだから仕方ない。

して欲しいこと。

してもらう、相手がいない。

有限の時間の中、無限の無駄。

他人から見れば無駄。

本人には、それはとても有用。

しかし、本人以外は皆、他人。

無駄は無駄としか判断されない。

無駄と言っている、それこそ、無駄なのかもしれない。

有限の時間は無駄。

その後も、友人とゲーム三昧。帰る気なし。（後書き）

ちょっとリアルに忙しくなってきました。
なるべく更新に影響が出ないように、がんばります。

日は暮れていき、気がつけば夜。(前書き)

今日の分、忘れるところだった。

日は暮れていき、気がつけば夜。

書くことが無い。

でも続けたい。

俺の中の動き回る葛藤。

近づきたい。

でも近寄れない。

私の中の静かで激しい葛藤。

買いたい。

帰りたい。

いろんな世界が交わって1つの世界を作り上げる。

まるで粘土細工のように。

水を加え、溶けてしまうような、脆い粘土。

飽きれば壊し、練り、作り、壊す。

神の手1つで、それが行われる。

とっても簡単で、とっても残酷な作業。

私の生きる意味と目標。

私の右手は、すでに鮮血に染まって色あせない。

日は暮れていき、気がつけば夜。(後書き)

やる事が多すぎる 暇人

買ってきた晩飯を、お笑い番組を見つつ頂く。(前書き)

内容が被ってても文句を言わない。

ノーヒント。すごく…読みにくいです…。

買ってきた晩飯を、お笑い番組を見つつ頂く。

バスの揺れ動たたきにたたた合わせた動くたたポニーテール。
黒くたたて艶のたある髪。

小柄で、高たた校の制服を着たたていたる。

そのた体型のたせいたで、大きくた見えたる鞆。

甘くたてつたたレッシュな香りたたをた振りまたいたてたたいる。

幸せたな時間は、とたてたたも短い。

彼女は、もう降りたたていく。

眼福なもたのは残っていない。

あとは、自宅たへの道たを進むだけ。

日常の、ほんたたの小さたな、よたたくあたる光景。

買ってきた晩飯を、お笑い番組を見つつ頂く。(後書き)

置換などを行うと読みやすくなります。

他愛もない話を交えつつ、食後にのんびりする。（前書き）

ネタが…ネタがねえよ…。

なんか遊びたいけど…ルビはやったし、たぬきもやったし、縦読みもやったし。

他愛もない話を交えつつ、食後にのんびりする。

さあさあ祭りの始まり。

踊り狂う輩に、傍観して笑う輩。

浴衣姿で舞うひと。

流れる音楽はテンションを上げる。

三日月も踊って星が笑う。

楽団員が鳴り、団扇の指揮棒。

眠るような君の恋をしたい。

人混みは、いつそう大きくなる。

何度だって聞こえる、色たちが歌って踊る世界。

涙だって流れる、汗も流れていく。

失くしていたものが、釣られて星に願いをする。

夢みたいな恋をしたい。

歩いていく町並み、触れていけば壊れていく君の姿。

他愛もない話を交えつつ、食後にのんびりする。（後書き）

参考曲は『骸骨楽団とリリア』

これを書く前、バニラエッセンスを口に中に直で味わってみた。

口の中がスツとしてカツとした。

何を言ってるかわからないと思うが、俺にもわからない。

これではホモカップルと同じである。俺にそっちの気はない。(前書き)

ずっと家にいた。ほとんどパソコンやってた。

小説(詩)は書かなかった。

これではホモカップルと同じである。俺にそっちの気はない。

暗い暗い、夜道の中。

自分の道を、切り開くんだ。

止まるな、歩き続ける。

棘の道も針の洞窟も。

自分のイメージを信じていけばいい。

未知の世界へと、大きな一步を踏み出していけ。

イメージしたらアクションを起こせ。

道なき道へ足を踏み入れていけ。

頭の中はいつでもクレイジーであればいい。

呼び覚ませ、自分の中のモンスターを。

頂上を狙っていけ。

立ち上がれ。

道のない世界でも、自分の足を確かめろ。

鳥たちが騒めくアクション。

これではホモカップルと同じである。俺にそっちの気はない。(後書き)

参考曲は『タマシイレボリューション』

夜も更けてきたところで、買った食い物だけ持って自宅へ帰る。（前書き）

自称ヘンタイじゃない尖角の今日の一言。

「まんこの毛が剛毛」

夜も更けてきたところで、買った食い物だけ持って自宅へ帰る。

じゃあね、また明日。

明日は二度と来なかった。

昨日の出来事は、すでに止まった時の中、昨日とは言えない時間がたっていた。

0時で止まった秒針、分針、時針。

動かない風、石ころ、雑草。

明日が無い世界の光は、黒く滲み、影をつくることをやめた。

金曜日の台風は、二度と来ない。

気が狂いそうな空気の中、たった一人、肺に溜め、生きることしかない。

剥き出しにされた地面は、干からびることなく、満たされることもないだろう。

夜も更けてきたところで、買った食い物だけ持って自宅へ帰る。（後書き）

尖角「ソウルをぶつけない」（笑）

暗くて寂しい自分の家。(前書き)

学校で疲れる 車校とか疲れる 小説書く気力が無くなる 学校で
(r y
という悪循環。

暗くて寂しい自分の家。

口をくすぐる、悪い声。

誘惑に負けたその口は、おもむろに唇を開く。

開いたが最後、後戻りはできない一方通行。

足掻けば足掻くほど深みにはまっていき、二度と出ることは出来ない。

逆に誘惑に負けない口は、深みにはまっていくことは無い。

しかし、深みにはまっていくという、味を知らない。

開けば味わえるその味を、決して味わうことなく終わる。

どちらが正しいのか。

どちらも正しくないのか。

やって後悔するか、やらずに後悔か。

暗くて寂しい自分の家。（後書き）

明日『TOLOVER ダークネス』の2巻を買おうか、どうするか。

買って後悔することは無いが、買いに行くのが暑い。

電気もつけずにパソコンを立ち上げる。(前書き)

暑いね。もう訳がわからないくらいに暑いね。

電気もつけずにパソコンを立ち上げる。

照り返しのする地面の上。

目的の達成のためには、避けては通れない道。

車の中は快適なのに、外の暑さは地獄の業火。

灼熱の大地の中、体が痛くても歩き続けなければならない。

足の裏が痛み、重たい足枷は、私の体力をすばやく減らしていく。

雲一つない、飲み物も与えられない。

汗が噴き出る熱の中で、逃れることは出来ず、ただ歩くだけ。

視界に映ったものは、平然と歩く人々。

なんで私だけ。どうして私だけ。

嘆き、唄いながら歩く。

電気もつけずにパソコンを立ち上げる。(後書き)

クソ暑い中、歩いてアニメイトに行ってきました。
ゆめにつきのガチャガチャやってきました。

その時、ヘッドホンを付けてた俺には、背後からの気配にまったく気付かなかった。
七夕なので、なんとなく七夕風にしてみる。

その時、ヘッドホンを付けてた俺には、背後からの気配にまったく気付かなかつ
小さな星たちが集まり、暗い夜空に川をつくりだす。

外から見れば、ただの星の集まり。

しかし、本人たちにとっては、それはとても眩しく美しい希望。

辺りを明るく照らしだし、歓声の声、乾杯の合図。

木々は揺らめき、音を立て、拍手をする。

地上を照らすお月様は、二人の様子を優しく見守っている。

夜空の川を渡るとき、より一層、周囲の歓声が大きくなる。

一年のほんの短い時間だけの、明るい川。

二人は喜びの声で話し始めていく。

その時、ヘッドホンを付けてた俺には、背後からの気配にまったく気付かなかったまにはね、綺麗なことも書いとかないとね。

気持ちよくパソコンをやってる俺の肩に、何かが触れた。(前書き)

もうネタが無い。どうしようか。
ネタを募集しよう。

気持ちよくパソコンをやってる俺の肩に、何かが触れた。

パリンと軽やかな音を立て、割れていく世界。

甘ったるい匂いで誘われ、深い落とし穴に落ちていく。

下には底が無く、落ちても落ちても風を感じていく。

落ちない者は落ちず、落ちる者はどこまでも落ちる。

気付かないものは、そのままいればいい。

惑わされた世界は、気付かないものはいない。

明るくない暗くもない、ただ一点だけのものがある。

一人用の船で、地上の砂の上を走る。

金色の赤い髪が、落ちる風になびき、黒く染めていく。

何事かと思い、ゆっくりと振り返る。

街中で踊る、一人の男性。

夏の蒸し暑い中、汗だくになりながら楽しいそうに踊っている。

私もそれに参加したかったが、足がそっちへ動いてくれない。

次第に人は集まりだし、とても楽しそうに踊る。

私と踊りの集団の間には、亀裂が入って崖をつくる。

それでも向こう側には人が集まっていく。

私は一人きり、そこに座って見てるだけ。

足を反対側へと向け、その場から離れる。

これ以上見ていたくないから。

私は涙を流さず歩いて行った。

何事かと思い、ゆっくりと振り返る。（後書き）

ゆめにつきのあのシーンを意識してみた。
わかる人にはわかるはず。

そこには、いつも夢の中にいる、あの少女がいた。（前書き）

ようやく本文が進みだした。

そこには、いつも夢の中にいる、あの少女がいた。

部屋はあるのに、扉はあるのに。

そこから出たくない、出ようとしない、出れない。

ベランダに出る窓は、半分だけ開いている。

テレビゲームは部屋の隅っこ。

机に本棚、ベッドもある。

寝るかゲームをするか、どちらかの生活。

いつまでたっても扉は開かない。

いつしか夢の中の生活が、自分の生活となっていく。

必要最低限の言葉しか発しない。

髪型はいつも同じ。

夢の中での人物とも仲良くなれない。

ベランダの窓はいつでも開いている。

そこには、いつも夢の中にいる、あの少女がいた。（後書き）

原作はゆめにつき。

なんだ夢か。そう思い、再びディスプレイに目を戻す。
(前書き)

尖角「学生生活でやってみたいこと…? オナニー」

なんだ夢か。そう思い、再びディスプレイに目を戻す。

店の前で大きな音を立てて動く、一つの招き猫があった。

金を呼ぶわけではなく、ただ、人の注意を引いた。

通行人は見えていくだけで、その店の品物には見向きもしない。

招き猫自体が大きいわけではなく、手の動きだけが、やたらとうるさい。

店主は、店の奥で座布団に座って動かない。

その店に商品はない。

招き猫は、客の注意を引く。

そのうちに招き猫も動きを遅くし、大きな音も聞こえなくなった。

物足りない場所の、物足りない昔の音。

なんだ夢か。そう思い、再びディスプレイに目を戻す。（後書き）

轟く招き猫。

無茶振りされました。

すると再び肩を叩かれる。

誰にも邪魔されない、私だけの世界。

私だけの領域。

周りの全ての物は、私のためだけの物、私だけの世界の物。

だれにも渡さないし、だれにも触れさせない、だれにも見せない。

この空間の全ての物、空気一つだって逃がさない、私の物。

完全に閉鎖された特殊な空間で、いつも一人で一緒に遊んでいる。

逃げられない、逃がさない空間。

閉じこもった彼女は一人、その物だけを持ち、その物だけに執着する。

外の世界を知らない孤独な空間。

どうせ夢なんだからと、無視してパソコン。(前書き)

引き続き、何を言いたいのかわからない。

どうせ夢なんだからと、無視してパソコン。

無理はしないでほしい。

だけど、やれるとこまでやってほしい。

弱いあなたは、もっともつと私を頼っていい。

死ぬのはダメ。

けれど死ぬ直前まで、必死に何かをするのはいい。

私はあなたが危険な事をしてても、止めたりはしない。

ずっと、いつも、あなたの事は見てるから。

思う存分やればいい。

死ぬ前には止めてあげる。

私を見つけるのは、それよりずっとあと。

姿は見えない私だけど、そばにはいる。

必死にならない時は、首を絞めに。

するとまたまた肩を叩かれる。ムカついて振り向く。

せつかく私が作り上げたのに。

せつかく私が出る限りの時間をかけて、必死で作ったのに。

なんでそんなに無表情で壊せるの？

人が作り上げたものを壊して、表情一つ変わらないの？

その瞬間に、今までの時間が全部壊れていくのに。

私以外のモノも、無表情のまま壊して歩いていく。

それでも抗うことは出来なくて、また一から作り直すしかない。

作れど作れど、再びあいつはやって来て、壊していく。

それはいつまで経っても完成しない。

するとまたまた肩を叩かれる。ムカついて振り向く。（後書き）

どこかで聞いた地獄の話。

石を1000個積み上げたら地獄から出れるとか、そんな話だった気がする。

ぬぐぐだっけ？

やはりそこには夢の中の少女が立っている。

真夏の恋の冷めそうな色。

伸びていく影は、いつまでも私から離れようとしなない。

太陽はだんだんと赤く染まっっていく。

私たちの色は急速に色あせて、再び白に戻って。

失われていった感情は、白へと戻ることなく何色にも染まらない。

ただ、黒色の私の影。

その影はいつでも黒くて、嫌でも着いてきて。

どうしようもないと分かっているのに、それでも諦めるところは出来なくて。

どこにいても危険は付きまとい、闇の中へと引きずり込まれる。

やはりそこには夢の中の少女が立っている。
(後書き)

そんな事よりゲド戦記見ようぜ、ゲド戦記。

俺も少女も見つめあったまま、どちらもアクションを起こさない。

口を真っ赤にして、道に落ちている死体を喰らう猫。

目玉をくちばしでつつく鳥。

様々な人の死体が、いくつもいくつも横たわる。

それは全部、胴体部分に切り込みが入り、臓物が飛び出している。

あの人に逆らうと、こういう目に逢う。

逆に言えば、あの人に逆らった人のもの。

世の中を上手に渡るコツは、逆らわないこと。

そして、長いものには巻かれること。

ここに転がってるものは、他の人に生き方を教えてくれた。

死してなお苦しめ。

俺も少女も見つめあったまま、どちらもアクションを起こさない。(後書き)

そんな事よりハリーポッター見ようぜ、ハリーポッター。

俺の方から話しかけると、少女は同じ言葉を返してきた。

目を瞑ってリラックスし、どこからか聞こえてくる声に身を任せる。

深く、体が重くなっていき、声だけに集中する。

体の奥底から、何か、得体のしれないものが湧き上がって来るのが分かる。

すうつと力が抜けていき、全身、何も動かしたくなる。

振り子の規則正しいリズムが、より一層、脳内に訴えかけてくる。

もはや、声だけにしか反応できず。

体もそれに合わせるように堕ちていく。

最終的に見えるのは、果てた姿と息をしない体。

俺の方から話しかけると、少女は同じ言葉を返してきた。（後書き）

催眠音声を聞いてみたので、それっぽい書いてみました。
作者に催眠術は効きそうにないです。

いつもとは違った夢だ。そう思ってた。(前書き)

ホラー注意。

「お」が混じってます。何個あるか数えてみると面白いかも。

いつもとは違った夢だ。そう思ってた。

[illegible]

いつもとは違った夢だ。そう思ってた。(後書き)

すみません。出来心なんです。ネタが無かったんです。
ちなみに、作者も何個「お」が入っているか忘れました。

少女はゆっくりと俺の前に立ち、無理やり膝に座ろつとしてくる。(前書き)

ネタが無い。助けてください。

少女はゆつくりと俺の前に立ち、無理やり膝に座ろうとしてくる。

雨空の下、傘をして歩く少女が一人。

上から傘を叩き、トントンと少女を呼ぶ。

トントトン。トントントン。

車道にたまった水は、車が通るたびに追い出され、たまっていく。

木々を揺らす涼しい風は、乗っている水滴を下にと落とす。

落ちたものは、少女の傘を叩き、呼び込む。

いずれ少女もいなくなり、落ちていく水滴は、ただ地面を叩く。

下にあった水は、上からの侵入に王冠をつくる。

人に踏まれた水は、吐き出され、再び戻っていく。

少女はゆっくりと俺の前に立ち、無理やり膝に座ろうとしてくる。(後書き)

割とマジで助けてください。

このままだと「め」だけで200文字になりかねませんよ？

呆気にとられていた俺は、その侵入を許してしまった。（前書き）

何も言われそうにないのでやってみた。

呆氣にとられていた俺は、その侵入を許してしまった。

[illegible]

呆気にとられていた俺は、その侵入を許してしまった。（後書き）

たぶん5個のぬ。

足を揺らしてパソコンの画面を見つめる少女。(前書き)

調子に乗ります。

足を揺らしてパソコンの画面を見つめる少女。(後書き)

「わ」がベース。「れ」「ね」「も」が隠れます。

俺は何も言わずにその少女を見つめる。(前書き)

図に乗るな！(A A 略)

俺は何も言わずにその少女を見つめる。

もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし
もしもしもしもしもしもしもしもしもしもしもし

少女は無表情で、時折俺の足を蹴る。

全部わかっていたつもりだった。

でもそれを認めるのは嫌だった。

枕に顔を埋め込んで泣き崩れた。

しっとり濡れた髪の毛を乾かす。

フラフラと歩いてベッドに戻る。

仰向けに転がり目を閉じていく。

ゆっくりと広がる自分だけ世界。

そこに彼が現れてまた泣き出す。

ハッとして開いていく元の世界。

明るい照明がついたままの部屋。

起き上がる元気もなくそのまま。

外は静かに私を包み込んでいく。

赤や白の光が少しずつばやける。

夢の国に。

少女は無表情で、時折俺の足を蹴る。（後書き）

参考曲は『スリープ・スカイ・ウォーク』
聞きながら書いてないけど。

俺「な、何してるのかな？」（前書き）

縦読み200文字 206行

走 抜 け ー 台 車 ー 所 近 くに ー 人 少 女 ー 駆 け

俺「な、何してるのかな？」

メジの後たつ降が雨 °くびなにかなやしは髪的女少ゝで風たけ抜

て け 透 し 少 ° ス ー ピ ン ワ い 白 た れ 濡 で 雨 と 汗 ` 中 の 天 晴 た し と メ ジ

が 着 下 た け 着 に 中 ° く い て い 乾 で 温 気 と 気 天 の そ ｀ は 服 の そ る い

なんそ　　ゝるすにけ付釘を線視の人るいにり周ゝてえ見とらすつう

議 思 不 ° く い て い 歩 に ま ま く 向 の 気 は 女 少 、 で い な し に 気 も 線 視

° た つ い て え 消 し ら 揺 を 髪 に 放 奔 由 自 、 つ つ き 撒 り 振 を 気 空 の 系

俺「な、何してるのかな？」（後書き）

オチなし。

少女」・・・脱出」(前書き)

R
- 1
8

少女「・・・脱出」

先輩の服をゆっくりと脱がしていく。

先輩は抵抗しないで、私の言つとおりに静かにしてくれている。

胸と下の部分を隠す布を剥いで、私の手を侵入させていく。

胸の突起は固くなって、下の部分は湿り気を帯びている。

優しく撫でると甘い吐息を漏らしている。

2か所を同時に触られて、顔を紅潮させて体をクネクネさせる。

指を入れると温かい液体が指に絡み付く。

そして、私も一緒に擦り合わせて部屋中に淫らな水音と液体を撒き散らす。

訳がわからない。この少女、電波少女と名付けよう。

嘘で塗り固められた私の体。

誰に話すときでも、私の言葉は嘘ばかり。

本当の言葉を出そうと思っても、そんな言葉はとっくの昔に失くしてしまった。

次から次へとこぼれ出る嘘。

じわじわと自分の首を絞めることも分かっているのに、止められない。

嘘から始まった人生は、嘘で終わることはなく、より酷くなって自分に帰ってくる。

私の周りに人はいない。

いるのは嘘をついてきた自分の後悔の人影。

振り払う事も、逃げ去る事もできない。

訳がわからない。この少女、電波少女と名付けよう。(後書き)

図書室人多すぎ笑えない。

ゆつくりと電波少女を膝から降ろす。

(RPG編スタート)(前書き)

RPG編スタート(たぶん)

ゆつくりと電波少女を膝から降ろす。 (RPG編スタート)

目が覚めると、真っ白な少女が目の前にいた。

見たことのない天井だった。いや、屋外だった。

確か俺は自分の部屋で寝ていたと思ったのだが、どうしてこんな
った。

俺「だ、誰かな？」

死人のような病的と言っていていいほど白い肌。純白のワンピース、
真っ白な髪。

水みたいに透き通るライトグリーンの目が、ずっと俺を覗き込んでいた。

無表情のままで見つめられると、どうにも不安な気持ちになる。

俺「降りてくれると嬉しいなあ……って……」

ゆっくりと電波少女を膝から降ろす。

(RPG編スタート) (後書き)

つづけ。

俺も椅子から降りて、少女と向き合う。

少女「…」

覗き込んでくる瞳はそのままに、なんとか座る体勢までもっていった。

そこで気が付いた。

服装はパジャマから私服に変わっていた。

近くには木の棒のようなものと、DSくらいの大きさの妙な機械が置いてある。

それに周りの風景だって、100円で買えそうなRPGみたいになっている。

…どうやら俺は訳の分からん世界に迷い込んでしまったみたいだ。

つまり、この少女は旅の仲間という訳だ。

木の棒で戦えとか鬼畜すぎる。

俺も椅子から降りて、少女と向き合う。(後書き)

まさかの続き。

顔や腕に触れてみて、実体があることを再確認する。(前書き)

RPG編は一回休み。

Google翻訳にて

日本語 イタリア語 日本語 に再変換したもの。

顔や腕に触れてみて、実体があることを再確認する。

静かな朝、入射した光の光線。

私の目を重複しており、ちょうど私の目の前に白になります。

日当たりの良い白と目がまだ開いて広がっていた、小さな花の庭。

ゆっくり歩いて、そこに移動し、入力してください。

日光はホットオレンジ色の花を、浴びて私を包み込むように見えた。

彼は地球、緑の目の前に巨大な広がりを感じるとき。

それは柔らかい草の感覚を通して、ある。

世界のオリジナルの感触に戻りますがまったく残っていなかった。

顔や腕に触れてみて、実体があることを再確認する。（後書き）

一部200文字にするために修正を施しています。

（「、」の削除）

文句一つ言わず、俺のベタ触り攻撃にも常に無表情。

俺「じゃあここにも仕方ないし、移動しようか」

木の棒と妙な機械を拾い、起き上がった方向へと進んでいく。

周りは草原で、ところどころに木が生えている。

敵も見er限りではないようで、木の棒は武器でも何でもないよ
うで。

少女とも話をせずに5分ほど歩くと、小さな村を見つけた。

土色のレンガで作られた、RPGで言えば最初の村だろう。

村に来て初めにする可以说是、武器防具、その他道具の購入。

…お金が無いような。

文句一つ言わず、俺のベタ触り攻撃にも常に無表情。 (後書き)

運営からのお知らせで、もう大変。

お気に入りになっていた小説が全部消えたというね。

2つしかお気に入りにしてないけど。

はてさて、少女が現れたのがどうしたものか。

俺「ねえ、お金持ってる？」

少女「…」

ないですよ。

つまるところ、金を集めるためには敵を倒さないといけないという訳で。

でもこんな棒じゃ倒せない訳で。敵を倒せる武器が欲しい訳で。

そうすると金が…。

堂々巡りの完成である。

村を通り抜けて草原に立つ。

村の周辺をしばらく歩きまわってみるが、一向に敵が現れる気配がない。

俺「…エンカウント率どうなってんだよ」

汗が滲み出るくらい歩いたが、やっぱり敵は出てこなかった。

はてさて、少女が現れたのがどうしたものか。（後書き）

最近バイオハザードにはまっています。
頭吹き飛ぶと楽しいね。

とりあえずパソコンを消して、部屋の電気をつける。

敵は出ないと踏み、次の町へと向かうことにした。

途中で村の人に話を聞かなかったことを少しだけ後悔しつつ、草原を移動。

俺「ねえ、お腹空かない？」

少女「…」

俺「疲れてない？ 大丈夫？」

少女「…」

会ってから一度も口をきいてくれない。

喋れないのか、喋らないのか。そこが問題だ。

無表情だし、感情が全くないと言っても過言ではない。

クールと言えばクールなのだが…。

その後も何度か話しかけてみたが、やはり反応はなかった。

とりあえずパソコンを消して、部屋の電気をつける。(後書き)

マグナムって素敵。

高威力だし、かっこいいね。

明るくなって分かったのだが、少女の両腕には包帯が巻かれていた。

敵もなく、ものすごくスムーズに次の町へと到着した。

この町でようやく情報収集というものを行った。

村人A「ようこそギバルの町へ」

俺「はあ、どうも。この世界ってどうなってるんだ？」

村人A「ようこそギバルの町へ」

俺「いやだからね……」

こんなとこまでRPG仕様だよ。

そうだよな、町とか村に入った時、一番初めの奴ってこんなんだよな。

俺「殴るぞコノ野郎」

村人A「ようこそギバルの町へ」

何回やってもダメなパターンだな。

明るくなって分かったのだが、少女の両腕には包帯が巻かれていた。（後書き）

町の名前に意味はないです。

だがあえてそこには触れず、ただただ少女を見つめ返していた。

いろんな人に声をかけたが、結局得られた情報は少ない。

ここが武器防具屋だ、とか。『せいすい』を使えば敵と遭遇しにくくなります、とか。

そんなRPGの初歩的なことしか話してくれない。

だいたい敵が出ないのに、出にくくなるってなんだよ。

どこかに金色に輝くカギを売っている町があるそうですよ、とか。

いい加減にしろ、この野郎。

この町唯一の宿屋に泊ろうと思ったが、

女性「1泊4ゴールドです」

金はねえと言っただろうに。

だがあえてそこには触れず、ただただ少女を見つめ返していた。（後書き）

最近プログラム言語を勉強してた。
飽きたからもうやめた。

少女は目を開けたまま、上下左右に僅かに揺れる。

俺「そういう訳なので、今日は野宿です。異論は認めない」

少女「…」

野宿するも何も、寝袋だとか、その他必要なものは一切持っていない。

ちなみに、その他の中には『野宿に必要な知識』も含まれている。

つまり何をすればよいのか、まったくわからない。

俺「ま、寝ればいいでしょ」

木陰になりそうな草の上で寝転がる。

気付けば空には星が上がっていた。

少女「…」

早いな…。

眠る少女を置いて、夜のフィールドを歩き回ることにした。

少女は目を開けたまま、上下左右に僅かに揺れる。(後書き)

シタゲ面白いね。紅莉栖かわいい。
＼(*。*)ノ カイバー

目の前に手をかざし、振ってみるが反応がない。

歩き回ると言っても、そこに面白い物はなく、特に興味を引くような物もない。

草を踏む音と、緩やかな風の音が聞こえる。

俺「…俺らしくないな」

無駄に歩くのをやめ、元の場所へと戻っていくことにした。

夜のフィールドというだけあって、ほんの少し肌寒い感じはする。

適当に布団の代わりになる物でも落ちてないかと、若干探しつつ戻った。

俺「…定番乙」

さっきまで寝ていたはずの少女は、最初からいなかったように姿を消していた。

目の前に手をかざし、振ってみるが反応がない。(後書き)

リビングはこういうときに不便だね。
親がいるから小説書きにくかった。

・・・寝てるよこの人。

さてさて…どうしたものか…。

探すにしても、どこを探せばいいのか。

RPG的には探すストーリーになるんだろうけど…。

…探すしかないですね。

まず周辺を見渡してみたが、何も成果なし。

町の方へ戻って捜し歩いたが、痕跡一つ見つからず。

俺「まあ…暗いし、朝になってからな」

元いた場所に戻り、朝になるまで眠ることにした。

半分どうでもいいと思いつつ、もう半分は眠気に襲われ、それ以上は考えなかった。

寝れば何とかなる。

・・・寝てるよこの人。（後書き）

オフ会で疲れた。罰ゲーム鬼畜すぎ笑えない。
でも楽しかったから良し！

起こそうと思ったが、夜も遅いのでそのまま寝かせておくことにした。

いつも通りに朝はやって来る。

気怠い体を起こし、少しの眠気が取れてから、少女の搜索を開始した。

まずは前回と同じく、町での聞き込みから。

で、やっぱり情報を得ることもなく、完全に手詰まり。

若干の後ろめたさを感じつつ、俺は次の町へと向かうことにした。

少女なんて最初からいなかった。いなかったんだから探しようがない。

よし。正当化完了。

相変わらず敵の出てこないフィールドを進んでいく。

洞窟を発見した。無視が一番。

起こそうと思ったが、夜も遅いのでそのまま寝かせておくことにした。

（後書き

昨日のボーリングで肩と腕が痛い。

さてと、じゃあそろそろ俺も寝るとしよう。

さらに進んでいくと、見事に町を発見することに成功した。

武器防具は相変わらず、持ち物に変化もない。

俺「…そういえば、この妙な機械は何なんだ？」

電源ボタンのようなものがあり、とりあえず押してみる。

数秒後、小さな音を立てながら画面が光る。

アイテム、呪文、装備、すてーたす、ならびかえ。5つの項目が並んでいた。

どうやらメニュー画面のようだ。

『ならびかえ』があるってことは、少なくとも1人以上の仲間がいるのか。

さてと、じゃあそろそろ俺も寝るとしよう。(後書き)

『ステータス』じゃなく『すてーたす』なのは仕様。

祝100話。20,000文字。

部屋の電気を消し、電波少女に薄い布団をかけ眠りについた。

仲間か。もうすでに1人を犠牲にした気がするが…気のせいだろう。

金もない俺は店屋に入ることもなく、散歩気分で町を歩いていた。広いメインストリートから、裏路地みたいな薄暗いところまで散策した。

そこまで広い町でもないため、全部を見て回るのに大した時間は要さなかった。

町の出入り口の最後の店屋。

寂れていて客足のなさそうな…道具屋だろうか。

看板もなく、営業しているかどうかも怪しい。

窓の隙間から話し声が聞こえた。

部屋の電気を消し、電波少女に薄い布団をかけ眠りについた。 (後書き)

毎日100以上のアクセスがある。何がそんなに面白いのか。
小一時間問い詰めて吉野家の牛丼を奢ってあげたい。

アクセスこわい。

朝。気持ちの良い目覚めに、若干テンションが高め。

聞こえてきた話を要約すると、いなくなった妹を探しに行く、というもの。

なんかどこかのゲームで聞いたことがあるよう…ないような。

探しに行くと言った声は女性のもの。

上手くいけば、もしくはRPGなら、これは仲間になってくれるフラグ。

それも回復魔法とかで傷を癒してくれる、お姉さんの存在。

そんな失敗フラグを乱立していると、その建物からさっきの声であろっ人が出てきた。

女性「一緒に妹を探してください。お願い！」

朝。気持ちの良い目覚めに、若干テンションが高め。(後書き)

暑すぎ、喉乾きすぎ。

学校とかめんどくさすぎ。

電波少女は、寝る前と同じ体勢で寝ていた。

俺「全力でお断りします」

出てきた女性は、お世辞にも可愛いとは言えない。

こういう奴に限って、声だけはやたらと良い。

女性「そんなこと言わずに！」

俺「だが断る」

こんな奴と一緒に旅なんて、想像しただけで吐き気がするわ。

もしもくっ付いてきたら、速攻で投げ飛ばせる自信がある。

なおも粘り強く絡んでくる女性。そして粘り強く拒む俺。

時間だけが無駄に過ぎていく。

話している隙に走って逃げた。しかし回り込まれてしまった。

起こすのもあれなので、二度寝することにした。

女性「何で逃げるの！」

…そりゃ、関わりたくない人に絡まれたら逃げるでしょうよ。

そう言うとな面倒なことになりそうなので、黙ったままゆっくりと遠ざかる。

合わせるように女性も、ゆっくりと近づいてくる。

どうやら逃げることは完全に出来ないようだ。

女性「私、ミニナ」

俺「そうですか。それでは、さようなら」

まだだ…まだ俺は逃げることを諦めたわけじゃない！

どうしてこーなるの？

逃げてても逃げててもついてくる。なにこれ怖い。

何かの刺激により、短かったような二度寝が終了する。

もう何度も言ったが、相変わらず敵の出ない暢気なフィールドを行動中。

そろそろ洞窟とか廃墟とか、そういう場所を探索したい。

松明を持ちながら色のついた鍵とか探したり、どこかに落ちている幻の鎧を探したり。

なんて言うか、冒険らしい冒険がしたい。

それなのに「疲れた」だとか「休む」だとか、ふざけるのも大概にしろと。

俺「次に口を開いたら、全身の骨を折りつくしてやる」

ミミナ「なんで怒ってるの？ 何もしてないじゃない」

何かの刺激により、短かったような二度寝が終了する。（後書き）

ミミナ？誰？　　って言う人は、前の話の真ん中あたりを読んでみよう。

目を開けるのは面倒なので、二度寝に移行する。(前書き)

1日に2話あげてみた。

目を開けるのは面倒なので、三度寝に移行する。

俺「何もしないから怒ってるわけですが？」

さつきから休憩ばかり。

距離的にはあまり進んでないのに、時間だけはどんどん進んでいく。

俺「何でついてくるの？ 何がしたいの？ 帰れば？」

ミミナ「そ、そんな酷いこ…」

俺「生憎だが、お前みたいな奴に優しくするほど優しくないんで」

岩に座って休んでいる奴を置いて、勝手に歩き始めた。

もう待つてなんていられない。俺が退屈だ。

どうせ敵なんていないんだし、放っておいても大丈夫だろ。

目を開けるのは面倒なので、二度寝に移行する。（後書き）

物語が全然進んでない気がする。

何の刺激も反応もなかった為、すぐに意識は消えていった。

俺は無視して歩いているのに、後ろからついてきている。

どうでもよかったので、少し興味を引かれた洞窟に入ってみた。

偶然と言ったら都合が良すぎるかもしれないが、まあ気にすんな。

洞窟だというのに、なぜか明るくてしっかりと先まで見える。

ここは呪文とか道具とかで周りを明るくして進むとか、そんなんじゃないのか。

いくつかの分かれ道もあり、いくつかの宝箱も置いてあった。

ただし全て中身はなく、その後の宝箱も無視した。

何の刺激も反応もなかった為、すぐに意識は消えていった。(後書き)

物語に変化を。

どれだけの時間がすぎただろうか。

さほど広い洞窟でもない様に思えたが、分かれ道の先には下への階段があつた。

何の躊躇もなくその階段を下りていく。

なおも洞窟内は明るく、まさしく序盤という感じ。

奥まで進んでみたが、鍵どころか道具すら落ちてない。

俺の数歩後ろを、だんだんと離れていく速度で歩いていた奴が急に叫び始めた。

俺「うるさい黙れ響くだろ」

なんか助けを求めているような気がしたが、きつと気のせいだ。

何も収穫がないまま入口へと戻っていった。

どれだけの時間がすぎただろうか。(後書き)

ゴキブリ退治したので書いてみた。

右手の生温かい感覚で目が覚めた。

そこに立っていたのは、最初に出会った少女だった。

俺「え？ あ、えつと…どこにいたの？」

少女「…」

さっきまで目の毒になる物を見ていたせいで、この少女がとても可愛く見える。

俺「じゃあまあ、行こっか」

少女「…」

洞窟を離れ、次の町を探して歩き進む。

不思議なことに、大した疲労感もなく、むしろこの子のそばにいるだけで疲れがとれるような…。

気のせいだろうか？ R P Gだし、それくらいの事があっても不思議でもないのか？

右手の生温かい感覚で目が覚めた。(後書き)

最近、変な夢ばかり見る。

昨日はミクにサイン色紙もらっ夢を見た。意味不明。

何やら人差し指だけに、ヌルヌル動くものが触れている。

もしかすると、この少女は白魔道士的なジョブなのか？

回復魔法的なものを俺にやってくれているのか？

表情を一切変化させず、ただ黙々とフィールドを歩き回る。

話しかけても無駄だということは重々承知なのだが、話しかけずにはいられなかった。

溜め息交じりで発見したものは、古ぼけた祠ほくらだった。

中に入ってみると、小さな泉と一つのオレンジ色の焚火、それから老人があった。

宝箱とかはなく、忠告を受けるような場所か。

何やら人差し指だけに、ヌルヌル動くものが触れている。（後書き）

ドラクエ2のほこらのBGMが大好きです。
聞きながら書きました。

薄目を開けてみると、一緒になって寝転がっている電波少女の姿が。

俺「あの…」

老婆「幻の剣（けん）を探しなさい。天と地が合わさる場所こそ、その剣が現れる」

謎の言葉を言い残し、その老婆は灰となって消えてしまった。

さっきまで灯っていた焚火も光を失い、泉は黒く濁りだした。

すっかり取り残されてしまった俺と少女。

…少女の方は無表情なので、何を思っているのか分からんが。

とりあえず祠を出る。

そういえば、この少女の名前を聞いてなかった気がする。

俺「お名前は何かな？」

少女「…」

薄目を開けてみると、一緒になって寝転がっている電波少女の姿が。（後書き）

少女の名前も募集します。

名前考えるのが面倒とか、そういう事じゃないんだからね！

- ・カタカナで2文字か3文字
- ・採用不採用は作者の独断と偏見
- ・一人何回でも何個でも書いてもらって構いません
- ・名前の募集しといて応募がないと、作者が泣きます

しきりに口だけを動かしている。(前書き)

O r z 非情な読者にやられた作者の図

しきりに口だけを動かしている。

俺「な、名前は…」

少女「…」

口を開いてくれないので、どうしようもない。

結局名前は分からないまま、当てもなくフィールドを歩き回る。

適当に決めようかとも思ったが、ネーミングセンスのない俺だからやめておいた。

そうこうしているうちに、人気ひとけのなさそうな村を発見した。

建物は壊されて、砂や石がむき出しの状態。

毒の沼とか伝説の鎧が落ちている、そういう場所を想像してもらえればいいと思う。

俺「何をしようか」

しきりに口だけを動かしている。（後書き）

『少女の』名前は採用させてもらいました。
また他の時に募集するかもしれないです。

名前は次話以降で出てきます。

曇った視界を無理やり開けると、電波少女が俺の指を啜っていた。

安全だとは思うが、なにしろRPGの世界だ。

何が起こるか分かったもんじゃない。

今まで見たこともない敵が出てくる、かもしれない。

いきなり目の前が爆発する、かもしれない。

ゆっくり慎重に壊された村を探索する。

ただ、どこもかしこも半壊、もしくは全壊した建物ばかりで、大した情報も得られない。

木も生えてない殺風景な小さな村なので、見渡すだけでも十分に思えた。

すると、今までノーリアクションだった少女が走り出した。

曇った視界を無理やり開けると、電波少女が俺の指を啜っていた。(後書き)

『おおかみかくし』が素晴らしすぎる。

不覚にも泣くところだった。眠ちゃんかわいい。

ゆっくり指を抜くと、ネットリした糸が伸びる。

走ったとはいえそれほど速い速度ではない。

後についていくと、ある建物の前で立ち止まった。

特に他の建物との違いは見られない。

足が進まないのか、躊躇ったかのように中へと入っていく少女。

俺もその中へ入っていくが、何か重要な物があるようにも思えない。

しばらく見ていると、少女は1つの小さな箱を持って戻ってきた。

俺「何それ」

少女「……」

手を伸ばしてそれを触ろうとするが、少女は固く抱きしめたまま離してくれなかった。

ゆっくり指を抜くと、ネットリした糸が伸びる。(後書き)

そんなことよりコナン見ようぜ、コナン。

さらに、ふやけて皺をつくっているありさま。

…こういう時こそ、あの妙な機械の出番だ。

電源をつけて、アイテムの項目をチェックしてみる。

『大切な物』のところに、謎の木箱というものが確認できた。

説明文を読んでもみると『少女が拾った謎の木箱』

俺「…それだけかよっ！」

何のヒントにもならない、どうでもいい情報しか書いてない。

項目を戻し、最初の画面。

相も変わらず『すてーたす』はすてーたすでしかなかった。

ここで、あることに気付いた。

俺「クレアって名前なのか」

さらに、ふやけて皺をつくっているあります。(後書き)

少女の名前は『RAY』様に貰いました。

最近(1ヶ月くらい前)、すーぱーそに子の子の存在を知った。
そに子かわいいなあ。

どうせ陸えるなら下の棒も（ry）（前書き）

自重は三文の徳。

三文って100円もしないはず。（諸説あります）
それなら自重しない方がいいよね。

どうせ啜えるなら下の棒も(r y

クレア「…」

少女の名前が分かったのはいいが、この先どうしたらいいのかは分からない。

ここの壊れた村は、この木箱を取りに来るだけっていうイベントだけだろうな。

淡々と物語が進んでいる気がするが、冷静になって考えると何一つ進んでいない。

さて…どうしたものだろうか。

村を出て、フィールドを歩き回り、何かを探してみるが。

俺「どこに行きたい?」

クレア「…」

3人目の仲間が欲しい。

どこかに可愛い子はいないのだろうか。

そう思ったが口にはしないで、ヌルヌルの指を洗いに行く。

しばらく歩いていると…そういえば、もうどれだけ歩いただろうか。

村とか町とか見つけては、特に何も起こらず、これといってRP
Gっぽい事もなく。

いったい何がしたいのだろうか。

愚痴っていると、今度は村が見つかる。

今までの村より自然が多め。

温泉があったり、パフパフしてくれるお姉さんがいそうな村。

いたとしても金がなけりや意味ないが。

村人に話しかけると、死にかけの男性から有力情報。

男性「銀髪の女を…探せ…」

そう思ったが口にはしないで、ヌルヌルの指を洗いに行く。
(後書き)

どういう時に村で、どういう時に町かって？

そんなの特に決めてないよ。

なんとなく。

戻ってきたとき、電波少女の姿はなかった。
(前書き)

ヤバい…本文のネタが尽きてきた。

- 1 サブタイトルが本文となっています。
- 2 力を注いでいるのはRPGの方です。

戻ってきたとき、電波少女の姿はなかった。

銀髪の女ねえ……。そんなのいくらでもいそうな気がするけど。

それを言った男性は、もはや物言わぬ人となってしまった。

俺「手がかりは……」

少女「……」

俺「ないよなあ……」

それ以外の情報とかは特になく、金とかもないので村を出ようとした。

すると、丁度村の出入り口というところで女性3人組の会話が、風に乗って運ばれてきた。

少し離れていたので、途切れ途切れだが。

女性1「東の洞窟から……。……が……」

女性2「……銀……。怖いわ……」

戻ってきたとき、電波少女の姿はなかった。（後書き）

「まさか」思っているあなた。
その「まさか」です。

とんでもなくリアルな夢を見たような、そんな感覚に陥った。

今、銀がどうかって言ってたよね？ 言ってたよね？

若干早歩きになりながら、目的地である東の洞窟を目指す。

旅する目的があるってのは良いもんだね、ホントに。

なんだか散歩してるみたい。

俺「もうずっとこのままでいいよな」

数分後。

2人は森の中にいた。

草原の地形から1歩足を踏み入れた途端、鬱蒼うつそうとした森へと変貌した。

さらに進んでいくと、あからさまに「毒ですよ」と言っている沼地を発見。

究極的にRPG仕様。

とんでもなくリアルな夢を見たような、そんな感覚に陥った。(後書き)

作者の心の中で描いているのは、ドラクエ1、2
それしか経験してないので。

その感覚も、ほんの僅かな時間で消え去っていった。

毒の沼地は避け、道なき道を進む。

食虫植物とか植物に擬態したモンスターとか、そんなのいなかった。

『究極的にRPG』はどこへいったんだ。

クレアも無表情で俺に着いてくるだけだし、喋らないし、気まずいし…。

そんなことで森を抜けると、今度は一瞬にして砂地へと変わった。

状況の変化が早すぎるだろうよ。

俺「そろそろ休憩でもしようか？」

クレア「…」

無表情キャラと仲の良い主人公は「僅かな表情の変化が分かる」とか嘘だ。

その感覚も、ほんの僅かな時間で消え去っていった。(後書き)

ゲーム楽しいです。

ネタバレになるので何も言いません。

なぜなら、今日はまだ開けてないはずの押入れが開いているから。

近くにあった小さな岩にクレアを座らせ、俺は砂の地面に座った。

舐め回すように顔を見てみるが『疲れた』とも『楽しい』とも、何も表情に出さない。

感情というものがあるのか、それすらも疑問だ。

綺麗な色の目は明後日を見ており、白い体は穢れを知らない。

白いワンピースは…。

…ちょっと待てよ。

メニュー開いて装備画面を開くだろ？

そして、クレアの服の装備を外せば…どうなる？

クレア「…」

恥の感情もないか？ やってみるか…？

なぜなら、今日はまだ開けてないはずの押入れが開いているから。 (後書き)

マリオシーケンサで遊んでいます。

中を覗いてみると、もぞもぞと動く物体を発見。

震える手でクレアの服の装備にカーソルを合わせ、選択し、装備なしを…決定！

恐る恐る結果を見ると…普段通りに服を着ているクレアの姿

ではなかった。

装備は解かれ、下着のみの格好に大変身していた。

下着の色もやはり白であった。

クレア「…」

俺「…」

表情に変化はないし、隠そうともしていない。

それならちょっとくらい襲っても、何も言わないし抵抗もしないだろう。

実験は第二段階へと移行する。

作戦名：俺はロリコンではない。

中を覗いてみると、もぞもぞと動く物体を発見。（後書き）

何事もなく車校を卒業できました。
小説の更新に影響はなかったね。

服を掴んで引きずり出す。(前書き)

1 2 3 話。

それだけ。

服を掴んで引きずり出す。

いやいやいや、待て待て待て待て。

俺は何をしてるんだ。今、何をしようとしてた？

？「止めないほうが良かったですか？」

俺「！？」

気が付くと、俺の背後には誰かが立っていた。

ほっそりとした白い腕、脚。整った美しい顔。程よくある胸。禍々しさを併せ持つ狐の仮面。

そして、艶があり肩より少し長いきれいな銀髪。

俺「お、お前が例の銀髪の……」

？「私の事を知っているんですか？」

村で聞いた話だと怖がってたような気もするが…。

俺「何してたのかな？」（前書き）

セリフの大安売り。

俺「何してたのかな？」

俺「お前、強いの？」

？「…そうみたいですなえ」

俺「俺たちをどうする気だ」

？「何を言ってるんですか？」

首を傾げられたが…敵…ではない？

俺「お前は敵なのか？」

？「ここに来るまでに敵を見ましたか？」

俺「…いなかった」

？「そういうことです。その機械で見たらいいじゃないですか」

俺「その手があったか」

電源を付けると、確かに3人目のところにこいつが。

俺「銀狐？」

銀狐「そうみたいですな」

俺「これ名前？ 種族じゃん」

俺「何してたのかな？」（後書き）

車の免許もらえました。

少女「・・・入口」(前書き)

続大安売り。

少女「・・・入口」

俺「名前無いの？」

銀狐「ありましたが、その名前は思い出したくないです」

・・・何かしらの過去があったのだろう。

なので、名前についてはこれ以上聞かない事にした。

俺「っていうかき、何でこの機械のこと知ってるの？」

銀狐「私の能力、とでも言うっておきましょう」

俺「あとさ、どうして敵がいない事を知ってたんだ？　もしかして、お前が黒幕じゃないのか？」

銀狐「それは・・・そうですね・・・」

俺「なんだよ。凶星だったのか？」

クレア「・・・」

少女「・・・入口」(後書き)

クレア空気。

話の流れなので仕方ない。

俺「何の？」

その後もいろいろとあったのだが、話してもグダグダになるだけなので省略する。

どうなったかを簡潔に言うと、銀狐が仲間になりました。

俺「で？ これからどうすればいいわけ？」

クレア「…」

銀狐「とりあえず東ですね」

何を根拠に言ってるのか分らんが、悪い奴ではないようだし、一応従っておこう。

仲間が1人増えても、敵が出るわけではないので散歩に変わりはない。

むしろ、ただでさえ金がないのに3人分もどしどしというんだ。

電波少女は黙ったまま動き出す。

銀狐「紹介が遅れました。私は銀狐です」

クレア「…」

一方的に紹介を終え、再び前を向いて歩きだす。

…あれ？　なんでクレアの名前知ってるんだ？

俺「なんで…」

銀狐「私の能力と言っておきます」

半分嫌われているような、そんな言い返しに、半分不機嫌になりながら足を動かした。

砂地を越え、そこにあつたのは洞窟。

見た目だけは前と同じような感じがするんだがな。

先頭は銀狐が、その後ろにクレア、そのすぐ後ろに俺が並んで入る。

またも押入れの中に入っていこうとするので、襟を掴んで元の位置に戻す。

洞窟の中は暗く、松明も何も持っていない俺たちだけでは、とても先には進めなかった。

ついさっき仲間になった銀狐の魔法で、辺りは今のところ明るく照らされている。

迷うことなく、周りの宝箱にも寄り道せず、まるで目的地が分かっているよう。

静寂が全体を包み込んでおり、迂闊に言葉を発することさえ出来ない雰囲気。

響き返ってくる足音と、どこからか滴る水の音。

不気味さも混じり合い、いつ何が起ころうとも不思議ではないだろう。

まとも押入れの中に入っていこうとするので、襟を掴んで元の位置に戻す。（後

ちよつと真面目に書いてみた。

wordのスペシャリストの資格取りました。
だつてspecialistだよ。なんかかっこいいよ。

俺も電波少女も、どちらも口を開かずに、沈黙が訪れる。

俺「どこに向かってんだよ」

銀狐「…洞窟の最奥です」

俺「何かがあるんだろ？ だから行くんだろ？」

銀狐「……」

結局、目的地しか教えてくれず、そこには何があるのか。どういう目的なのか。

何もわからない。

俺「にしてもさ、歩いてるだけなんて暇だよなあ」

クレア「…」

銀狐「…」

俺「しりとりでもしようぜ！ 文字稼ぎにもなるしさー！」

クレア「…」

銀狐「どうぞ、お先に」

俺「お、乗ってくるか！ じゃあ、洞窟の『つ』」

銀狐「通勤」

俺も電波少女も、どちらも口を開かずに、沈黙が訪れる。（後書き）

「！」「や」「……」など、露骨な文字稼ぎ。

何分くらいそうしていただけるか。

俺「ごめんなさい。黙ってます」

洞窟内は再び静寂の間へと変化した。

ひたすら歩くだけの簡単なお仕事です。誰かやってみませんか？

右に曲がったり左に曲がったり、階段下りたり。時にはゴツゴツした場所を歩いたり。

俺「銀狐さん。疲れました。休憩したいです。休憩したいと私は考えています」

銀狐「…仕方ないですね」

少し広め（RPG風に言うなら5×5マス分）の場所に3人向かい合って座り、ど真ん中には光る玉が浮いている。

何分くらいそうしていただろうか。(後書き)

読者ア！ ネタを考えろオ！

すいませんごめんなさい悪気はないと思っんです。
ネタが枯れ果てました。

先に口を開いたのは電波少女の方だった。(前書き)

クレアには、またちょっと空気になってもらおう。
『(気配的に)空気になる能力』でいいよね？

先に口を開いたのは電波少女の方だった。

クレア「…」

銀狐「…」

誰もしゃべらないし、誰もアクションを起こさない。

ほかの2人はどうなのかは知らんが、俺にとっては非常に気まずく重い空気になっており、一刻も早くどうにかしたい。

こうなりや第何回目かの質問攻めだ。

俺「いい加減にお前がどんな奴なのか、聞かせてもらおうか」

銀狐「…黙秘権です」

俺「いや、答えてもらう。答えないなら仲間にはならないし、させない、認めない」

銀狐「…後ろを向いてもらえますか？」

少女「私は、残り1ヶ月で滅びゆく地球を助けに、2万4千光年離れた未来から
光年は距離です。

少女「私は、残り1ヶ月で滅びゆく地球を助けに、2万4千光年離れた未来から
俺「なぜ後ろを向かせる必要がある？」

銀狐「あなたが聞きたいと言ったからです。条件の1つと想ってください」

仕方ない。話に顔は必要ないし、それでもいいだろう。

俺は無言で背を向けた。

その時、同時にクレアも後ろを向いたのが目に入った。

銀狐「…私の話が終わるまで、こっちを見ないでください」

俺「鶴の恩返しだよ」

銀狐「こちらを向いたとしても、見えなと思いますよが」

そう言い終わると、突然真っ暗闇に包まれていった。

やはり少女は電波であつた。
(前書き)

きやつぽーい。台本回だよ。

やはり少女は電波であつた。

俺「なんで明りを消すんだよ」

俺の声でかき消されそうになつたが、小さく物音がした。

何かを置いたような『コトツ…』と短く軽い音。

銀狐「私は…私の本名は、ラグナス・デオナグイ・ラ・フ・テクト」

俺「は…？ ラ…何？」

銀狐「…前の人も、同じような事言つてましたよ」

俺「誰だよ、前の人って」

銀狐「質問は1つずつにしてもらえますか？」

俺「じゃあ名前から」

銀狐「縮めて『ラグ』でいいですよ。前もそう呼ばれてましたから」

少女「具体的には、2万4千光年後の水星の連中が攻撃を仕掛けてくる」(前書
引き続き台本だよ。

少女「具体的には、2万4千光年後の水星の連中が攻撃を仕掛けてくる」

俺「ラグ…ね。じゃあ前の人ってのは誰だよ」

ラグ「…」

俺「どうしたんだよ」

ラグ「…前の方は…前の人です。それ以上、説明のしようがありません」

俺「…」

ラグ「なぜ敵がないか。それを知りたいようですね」

俺「その通りだ」

ラグ「私が…そうしたからです」

俺「は？」

ラグ「私が、全部そうしたんです。そうなるように、やったんです」

訳が分からないよ。

俺「私がやった？ 敵を倒しつくしたとも言っのか？」

ラグ「…そうです」

俺「そうか、それは大変だな。どうやって守ってくれるんだ？」（前書き）

微グロ注意（作者にとっては普通）

俺「そうか、それは大変だな。どうやって守ってくれるんだ？」

俺「そんなこと出来るわけないだろ」

ラグ「全滅させれば敵は出てきません。当たり前事です」

いやいや、どう考えてもおかしいだろ。

RPGで敵の数に上限がある？ 聞いたことねーぞ、そんな設定。

俺「じゃあお前のレベルは相当高いんだろっな」

ラグ「…当然です。あなたを地獄に送るなど造作もない」

最後の一文に違和感を覚えると、後ろから赤い光が射しこんできた。

ラグ「骨を折る音、臓器が潰れる音、そして曲がってはならぬ方向に曲がる全身」

光に加え、思い出したように嘲笑う声が混ざる。

ラグ「見たことありますか？ 血の池というものを。あれほど妖艶な光景は他に無い」

俺「俺らも殺す気が」

ラグ「幾つもの相手を切り刻んでも、満たされないんですよ。抑えられないんですよ」

俺「この人殺し」

そう言々とラグの言葉は止まり、数秒の静寂の後、最初に聞いた物音がした。

また数秒の間を置き、ゆっくりと明かりがついた。

そこには狐の仮面を被ったラグがいた。

俺「そうか、それは大変だな。どうやって守ってくれるんだ?」(後書き)

気付いたら250文字も書いてたので400文字にした。

いるかどうか分らないが補足。

最初の物音は、ラグが仮面を外して床に置いた音。

今回の物音は、外した仮面を着けた音。

なんで外したかはラグに聞いてください。

少女「水星の攻撃に対抗して、私たちもそれに張り合う。そして水星ごと奴らを

最後の鍵かつこがないのは仕様。

少女「水星の攻撃に対抗して、私たちもそれに張り合う。そして水星ごと奴らを

ラグ「…驚かせてしまいましたね。先を急ぎましょう」

俺「お前は馬鹿か。誰が人殺しと一緒に行動する？」

ラグ「…」

俺「行くならお前一人で行けよ、殺人鬼め。行くぞクレア」

その場から冷たく逃げ去ろうとしたのだが、ここは洞窟の中。それも真つ暗な。

明かりを持たない俺は、当然のごとく帰る手段がない。

そのことを知ってか知らずか、クレアは俺の呼びかけに答えず、微動だにしていなかった。

ラグ「人殺しと一緒には嫌なのでは？」

少女「水星の攻撃に対抗して、私たちもそれに張り合う。そして水星ごと奴らを

「永遠に」「轢殺」

この2つのエンドが大好きです。

俺「ストップ。私『たち』について詳しく聞こうか」

俺「…」

ラグ「では先に進みましょうか」

ラグとクレアが立ち上がり、光の玉が腹あたりに浮く。

2人は歩きはじめ、その後ろを無言でくっ付いていく。

ここに来たときは、俺とクレアの距離が近かったが、今はラグとクレアの距離が近い。

そうこうしているうちに、また1つ階段を下り、先に進んでいく。

相も変わらず無言タイムフィーバー。

RPGの主人公達もそうなのかね。

あいつら、不正不満を言わずただ黙々と歩いて疲れないのかな。

電波少女は黙り込み、やがて何かを思いついたように口を開いた。(前書き)

書けば書くほど『電波女と青春男』に近づいていく。

電波少女は黙り込み、やがて何かを思いついたように口を開いた。

前を歩いていた2人が立ち止まった。

バカな考え事をしていた俺は、ぶつかりはしなかったものの、ラグの背中に突撃するところだった。

ちなみにクレアはラグの隣だ。

髪から匂ってきた、微かな柑橘系の香水。

もう一度嗅ぐと思ったが、さすがに変態的なのでやめておいた。

俺「…何この扉」

銀色をした、洞窟の雰囲気とはかけ離れた扉が目の前に居座っていた。

何やらラグがゴニョゴニョ言っていると、その扉は手も触れずに開いた。

電波少女は黙り込み、やがて何かを思いついたように口を開いた。(後書き)

Excelのスペシャリストの資格取りました。

だってspecialistだよ。なんかかつこいいよ。(2回目)

少女「・・・お腹減った」(前書き)

インなんとかさんみたい。

少女「・・・お腹減った」

先に広がっていた光景は、壁際にいくつもの松明が飾られていた。

しかし下を見ても燃えカスなどは落ちてなく、たった今点けられたのか、それも別の何かなのか。

はつきりとは分らないが、これ以上先はなかったので、目的地はここということだ。

部屋の真ん中には、人間のものと思われる頭蓋骨が祀ってある。

黒っぽい台座に赤い布。その上にそれは置かれていた。

よく見ると、台座のあたりには何やら落書きのような文字が書いてある。

少女「・・・お腹減った」(後書き)

あえて情景描写だけにした。

俺「・・・そうですか」(前書き)

ご飯くれると嬉しいな。

俺「・・・そうですか」

俺「なにあれ？」

ラグ「・・・骨ですよ」

俺「いや、それは分かるんだけど。何？ 薬の調合にでも必要なの？」

答えは返ってこず、またその場を動こうとしなかった。

俺が痺れを切らして前に行こうとすると、腕が現れて制止させられた。

ラグ「死にたいならどうぞ」

俺「...。じゃあ何なのか教えてくれよ」

ラグ「だから骨ですよ。吸血鬼の」

吸血鬼？

そう思い、もう一度頭蓋骨を見てみると、確かに牙っばいのが見て取れた。

俺「何で吸血鬼？」

気付けば時間はすでに昼過ぎ。

疑問に思っていると、クレアが頭蓋骨に向けて歩き出した。

俺「おい、危ないぞ！」

ラグは止めることなく、クレアは止まることなく、目的の場所に到着。

距離はそんなにないので、たった十数歩歩いただけだが。

俺「なんだよ、危なくないじゃん」

俺が1歩前に出ると、急に胸のあたりに鈍痛が走る。

それと同時に、前からの衝撃で後ろに軽く飛ばされた。

ラグ「そんなに死にたいんですね」

どうやら、ラグの銀の短剣の柄で押されたようだ。

昨日晩飯を食べてから、12時間以上何も口にしてない事になる。(前書き)

伏線も何もあつたもんじゃない。

昨日晩飯を食べてから、12時間以上何も口にしない事になる。

俺「何すんだよ。別に平気だったじゃねえか」

ラグ「自殺願望に加え盲目ですか」

ラグが指差す方向を見ると、壁に矢が突き刺さっていた。

見ただけでも抜けなさそうと分かるくらい、それはもうガッチリとメリ込んでいた。

ラグ「毒のおまけ付きらしいですよ」

その矢は、少しだけ赤みを帯びた液体で濡れていた。

俺「なんで…クレアは大丈夫だったんだよ」

ラグ「ヒントは、あなたの言う『落書き』ですよ」

落書きなんて発言したっけ、俺。

俺「と言われても、うちには食い物はない」

俺「落書きじゃないのか？」

ラグ「落書きだったらヒントなんて言いませんよ」

俺「確かに」

ラグ「あれはですね」

ラグの言ったことをまとめよう。

べ、別にセリフを減らしたいからとか、そういう気持ちは全くないです。はい。

要は、あれは魔法陣的なものらしい。

俺が魔法の範囲に入ったから作動したらしいです。

クレアが魔法に引つかからなかった事も聞いたのだが、それは答えてくれなかった。

ラグ「分かりましたか？ 盲目自殺者さん」

冷蔵庫を開けて確認してみるが、ないものはない。

俺「ああ分かった。分かったからその呼び方はヤメロ」

クレアの方を見てみると、暇そくに頭蓋骨を観察している。

俺「あれどうすんだよ。持ち出すのか？」

ラグ「そうですねえ……。欲しいですか？」

俺「欲しいって言ったら盗^もっていくのか？」

ラグ「欲しいなんて言うんですか？」

俺「じゃあ欲しい。持ち出す」

言い終わったのと同時にクレアが戻ってきた。

頭蓋骨を持って。

ラグ「戻りましょうか」

どうやら見透かされていたようだ。

意味不明な少女を置いて買い出しに出かけるのは、いろんな意味で不安だ。

俺「お前、誘導しただろ」

ラグ「何の事でしょうか？ 早く地上に戻りましょう」

先頭はラグが歩き、その後ろにクレアが、その後ろに俺が。

来たときと全く同じ隊列で引き返していった。

一度通った道だからなのか、目的の場所がはっきりしていたからなのか、随分と早く地上の光を浴びれた感じがした。

ラグ「さて、あなたはどうしますか。殺人鬼と一緒にいますか？」

俺「やなこった。いつ殺されるか分かったもんじゃない。行くぞクレア」

意味不明な少女を置いて買い出しに出かけるのは、いろんな意味で不安だ。

（後

最近またもGTA?にハマりつつある。

しかし、この少女を連れて買い出しに行くのは、もっと不安だ。

クレアはラグの後ろに張り付いて、一切動かなかった。

ラグ「もう一度聞きます。来ますか？」

俺「別に俺一人だって」

ラグ「それが答えですか。では一人で野宿がんばってください。私たちは宿に行くので」

結果から言うと俺は宿にいた。

ベッド2つは女性人に陣取られ、俺は虚しくソファーに座っている。

ま、それが常識ですわな。

かたや俺は百合百合しい場面を見て嘆くんすわ。

it'a eros time・腐ってる？　それ、褒め言葉ね。

悩んだ末に俺が出した結論は・・・。

男として、やらねばならぬ時がある。

それは毎日してることだろうが、ここでやらねば男が廃る。

やるんだ、俺。

扉の向こうからは水の流れる音が聞こえてくる。

そう…ちょうどシャワーを流すような音だ。

この扉を開ければ、まずは脱衣所。そしてその先は。

俺「パラダイス…」

生唾を流し込み、1つ目の扉の開放に取り掛かる。

音を立てれば即終了の過酷なミッション。

だがそれでも、やらねばならぬ時なのだよ。

慎重かつ素早くそれを…。

悩んだ末に俺が出した結論は・・・。
(後書き)

ようやくネタが固まってきた(本文)
考えるの忘れてた(サブタイトル)

俺「邪魔するぞー」

開けた。

途端に温かい湿気が流れ込んできた。

足音を立てぬように、慎重に足を延ばす。

第一目標は脱ぎたての衣服。

僅か数歩なのに、人生で一番緊張しているかもしれない。

汗が流れ辿り着いたカゴの中にあっただのは、それはもう眩しいほどのお宝だった。

ほんのり温みの残った下着は、真っ白のと薄水色のがあった。

見ただけでどちらもの物か、すぐに判断できる。

もう我慢の限界だったのだが、ここで事を起こしてしまっただけは意味がない。

友人「お前さあ、飯食いに来るだけなのさあ・・・」

意を決して、風呂場と脱衣所を隔てる扉に手をかける。

冷やかな汗が一筋、俺の頬を伝っていく。

左手に下着の感触を残しつつ、右手にはヤバいくらいの手汗。

今後の人生がどうなるうとも構わない。

今この扉を、邪魔な障壁を、開ける！

俺「大興奮である！」

叫びながら右手に力を込めて、扉を勢いよく開いた。

が、そこには浴槽に深く入って、顔しか見えないクレアがいた。

いや、正しくは、クレアの姿しかなかった。

俺「あれ？ ラグは」

友人「お前さあ、飯食いに来るだけなのさあ・・・」(後書き)

クソッ！なんで祝日なのに学校なんだよ！クソッ

俺の後ろにくっ付いている少女を見て、友人の言動は停止した。

ラグ「こっちですよ」

声が聞こえてきたのは後ろからだった。

同時に、背中に手を当てられた。

ラグ「動く痛い事しますよ」

俺「頭は…動かしてもいいですか？」

ラグ「許可します」

何で許可したのかは知らないが、許しはもらった。

限界まで顔を向けて目線をラグへと向けると、バスタオルらしきものを巻き、いつも通りの仮面をしていた。

俺「お面は取らない…んですか？」

ラグ「取らないです」

俺「蒸れますよ？」

ラグ「ご心配どうも」

友人「お前いつの間に。相手は？　いつやったの？」

俺「何でお面取らないんですか？」

ラグ「覗くなんていい度胸してますね」

俺「だ、大興奮で…ある」

ラグ「激痛を味わって死ぬか、少し痛い思いして気絶するの、どちらがいいですか？」

俺「…死なない方向で」

ラグ「^{かしこ}まりました」

鈍い痛みが首を貫いた。

後は、倒れる感覚も倒れた痛みも感じなかった。

ラグ「邪魔が入りましたね。さて、ゆっくりしましょうか」

クレア「…」

ラグ「…。どうしたものでしょうね」

クレア「…」

友人「お前いつの間に。相手は？　いつやったの？」（後書き）

GTAのエンディング？スタッフロール？　初めて見た。
そんなのあるんだね。異常に長かったし。

俺「ちげーよバカ。俺にそんな相手が・・・」

何やら地面が柔らかい・・・。

シャワーの音は...聞こえない。

俺は...俺は、何してたんだっけ...？

ラグ「あなたは覗きを働いて気絶しました」

ああ、そっか。そんなことしたなあ...

ラグ「そして私とクレアさんの大切なものまで奪っていき」

気持ち...よかったなあ。

ラグ「拳句の果て、自らの精を中に出して...」

最高だったぜ...。ん？

俺「待てこら。捏造すんなハゲ」

ラグ「起きましたか」

俺「うるさい。ある事ない事言いやがって。ふざけんな」

俺「ちげーよバカ。俺にそんな相手が・・・」(後書き)

そつえば30,000文字超えてるよ。
報告忘れてた。

友人「いるわけないよな。俺にだっていないのにな」

ベッドから起き上がると、いつも通りの服装をしている2人がいた。

ラグ「まったく…男どもは。そんなに見たいんですか？」

俺「見たくないわけがない」

ラグ「見てもいいですが、すぐに死ねますよ」

俺「死なずに見る方法を探すので結構です」

一通りの冗談を言い終えると、外が騒がしい事に気付いた。

そういえばよ、何で俺はここにいるんだっけ？

覚えてるのは、金に釣られて一緒に…。

ラグ「回想はどうでもいいので、早く外の状況を」

俺「飯食わせてくれるなら怒らないが？」

俺「あー状況説明じょーきょー説明。お外が賑やか。以上」

ラグ「お祭りでもやっているんでしょうかね？」

俺「お前の頭の中でな」

カーテンを少し開け、外の様子を確認してみるが、騒いでいる元凶は見当たらない。

たまに聞こえる金属音のせいで、どうしても嫌なイメージしかできなない。

ラグ「実はクレアさんは敵のお偉いさんの娘で」

俺「は？」

ラグ「敵はクレアさんを取り戻しに来た、とか」

クレア「…」

俺「そうだとしたら怖いぜ？」

友人「・・・詳しく聞かせてもらっぜ」

俺「最悪、殺されるな」

ラグ「そうならないために、早いとこ逃げましょうか」

手早く荷物をまとめ、ほんの少しの間だけ休んだ宿を離れる。

結局のところ、あの騒ぎが何だったのか、分かることはなかった。

俺「金もつたいねえな・・・」

ラグ「出したのは私ですが」

俺「お前のおっさんなのか、クレア」

クレア「・・・」

ラグ「真相は闇の中です」

俺「まあ戦ったとして、少なくとも俺には勝ち目がないしな」

ラグ「武器とかどうしたんですか？」

友人「・・・詳しく聞かせてもらっぜ」（後書き）

Power Pointのスペシャリストの資格取りました。
だつてspecialistだよ。なんかカッコいいよ。（3回目）

友人は気付いていないのだろうか？　すでに電波少女は中にいる事に。

俺「置いてきた」

ラグ「…なぜ」

俺「いや、だって木の棒で戦えないじゃん」

ラグ「何でもつと強い武器買わないんですか」

俺「俺最初からお金ないって言ってるよね!？」

ラグ「そういえば言っていましたね」

俺「そもそも敵はいないんだろ？」

ラグ「では、さっきのはどう説明します？」

…そう言われると…返事に詰まるのだが…。

俺「ってか、全然話が進んでないじゃん!」

ラグ「話を逸らしましたね」

俺「そうだけどさ。そうじゃなくて」

まあ俺はどういう返答でも入っていくつもりだったが。

俺「この後どうするのよ。どこ行くよ」

ラグ「んー…他の町や村でも探してみますか？」

俺「それが妥当か…」

？「ちよつと待ちな！」

…みんな、何か聞こえたか？ 聞こえないよな？ そついう事にしよう。

ラグ「誰ですか、あなたは」

やめてくれよ…勘弁してください。

？「おまえは何を黙っている」

俺「…」

クレアじゃないが、ここはもう無口を貫き通そう。

ラグ、お前ががんばって相手をしてくれ。

ラグ「…面倒なんですけど仕方ないですね」

友人の家のはずなのに、了解を得ずに冷蔵庫の中を物色する。

ラグ「まず名前から教えてもらってもよろしいですか？」

？「名前を聞くときは自分から言うのが礼儀だろう」

ラグ「…私たち、先を急いでるので…。また今度にしてくれますか、アリスさん」

アリス「な、なんで私の名前を知ってる！？」

…もういろいろメンドクサイ。

展開も何も全て長くなりそうだ。

アリス「おい答えろ！　なんで知っている」

ラグ「本当に面倒な人ですね…。ここら辺でバトンタッチで」

俺「は？　俺を見るな。嫌だからな」

友人の家のはずなのに、了解を得ずに冷蔵庫の中を物色する。（後書き）

バイオ4にハマってます。1週目クリアしたところ。

友人「・・・」

アリス「なんでもいいから質問に答えろ」

俺「…じゃあさっさと質問しろよ…」

アリス「ここで死ね！」

俺「それ質問じゃなくね？」

急に剣を構えてこちらに走り込んでくる。

俺「ちょ、待て！ ラグ、チェンジ！」

ラグ「しょうがないですね…」

向こうのロングソードみたいな武器を、短剣で完全に防ぐ。

アリス「なっ」

ラグ「そんな構えでは倒せる敵も倒せませんよ」

アリス「覚えてろよっ！」

俺「行っちゃったよ」

ラグ「不思議な方ですね」

友人「・・・」(後書き)

RPG風だということを忘れていた。

俺「何見てんだよ気持ち悪い」

ラグ「さて、では気を取り直して町探しと行きましようか」

俺「もう疲れた。歩けない」

ラグ「…少しはクレアさんを見習ったらどうです？ 不満なんて言わずにしっかり歩いてますよ」

クレア「…」

俺「クレアは違うね？」

ぐちぐち不満を言いながらも、渋々、嫌々、歩いていった。

…もうすぐ夕暮れだし。

また野宿になるとか、そういうのは勘弁願いたい。

そうしてどれだけ歩いただろうか。

町どころか建物すら見えない。ここはどこなのよ。

友人「安心しな。お前なんか見てないからよ」

ラグ「ここはどこら辺なんでしょうね？ 私にも分かりません」

俺「もう何でもいいや。雨風を凌^{しの}げるなら何でもな」

ラグ「あんなところに塔が」

俺「ねーよ」

本当にありました。

誰だよ、建物すら見えないって言った奴は。

ラグ「これで今日のところは大丈夫そうですね」

クレア「…」

俺「クレアが心配だって言ってるぜ」

ラグ「そうなんですか、クレアさん」

クレア「…」

俺「心配過ぎて胸が張り裂けそうだな」

ラグ「裂ける程も…」

友人「安心しな。お前なんか見てないからよ」(後書き)

バイオ4

シカゴタイプライター(弾数無限・高威力マシンガン)と弾数無限
ロケットランチャー買ったら、やる気なくなった。

友人の目は電波少女を捉えていた。

クレア「…」

ラグ「いえ、なんでも」

塔の中に入っていく俺たち。

不気味な像が4つあったのだが、この際気にしない事にしよう。

ラグ「何でしょうか、この塔は」

俺「ドラゴンの塔とか、風の塔とか」

ラグ「上から落ちたら隣の大陸に行けるとか、そういうのですか」

俺「マイナーなネタを…」

ラグ「ついんですし、探検でもしてみましようか」

俺「休憩してからな」

石で出来た床に寝転がると、冷やりとした感覚と同時に、体が痛くなった。

友人の目は電波少女を捉えていた。(後書き)

「とう」の変換がすごい。

1 回目：当

2 回目：党

3 回目：燈

4 回目：塔

電波少女は視線に気付いてないようで、電源の入ってないテレビを見つめている
ラグ「休憩終了です」

1階は何もなく、2階への階段を歩かされる。

が、この階も1階と同じく4つの像があるだけで、それ以外には特に何もない。

俺「お前敵を全滅させたんじゃないの？ この塔の事知らないの？」

ラグ「こんな塔、見たことないですね」

外観をあまり見てないから、どこまで続いているのか分からない。

しかし、塔ってくらいなんだから、それなりに高さはあるんじゃないの？

それでも気付かないの？ 怪しいねえ、臭うねえ。

俺「あ、なに、お前もロリコンなの？」

怪しさを感じつつも歩いていると、ラグが突然足を止めた。

俺「どうしたんだ？」

ラグ「行き止まりです」

俺「行き止まりって、ほぼ一本道だったじゃねえか」

ラグ「目を瞑って歩いていたんですか、あなたは」

俺「え？」

周りを見ると、いつの間にか広場みたいな空間ではなかった。

ラグ「馬鹿は放つといて、行きましようかクレアさん」

クレア「…」

俺「…」

無言で来た道を戻り、別の道を試してみる。

これ何階なんだろうか。記憶にない。

俺「あ、なに、お前もロリコンなの？」（後書き）

この話は次への布石。

超次元ゲーム ネプテューヌ買いました。
もちろんパケ買い。

友人「ち、違うしな！ 全然そんなことないしな！」

歩くこと数分。

ラグ「また行き止まりです。迷路なんて聞いてないですよね、まったく」

俺「散歩は割と嫌いじゃないぜ」

ラグ「ではもう少しだけ楽しみましょうか」

俺「いいことを教えてやるよ。右手法って知ってるか？」

ラグ「あれは平面で、なおかつゴールが外側にある場合のみです。今回は例外です」

クレア「…」

ラグ「クレアさんに笑われていますよ。恥ずかしいですね、自分の浅はかな知恵のせいで」

…もう塔から飛び降りようか。

友人「ち、違うしな！ 全然そんなことないしな！」（後書き）

「散歩は割と嫌いじゃないぜ」

このフレーズが使いたかっただけ。

俺「ゆっくりと少女を観察しようぜ。な？」

ここまで言われるとは思ってなかったぞ。

また黙々と来た道を戻っていく。

散歩は好きだが、歩きすぎるのはさすがに疲れてきたぞ。

ラグ「あまり迷うようなら最終手段をとりますが？」

俺「最終手段ってもしかして……」

ラグ「もしかするかもしれないね」

ゲーム的にそれはどうかと思うが……。

まずRPGならそんなことは出来ないと思う。

まさかな。いくらラグであっても、それはない。あってはならない。

ラグ「また話が進みませんね」

俺「ゆっくりと少女を観察しようぜ。な?」(後書き)

大学に祝日はないのか、くそが。

見るのに飽きたのか、電波少女はテレビを触りだしていた。

俺「壁を壊して進む、なんて言いませんよね」

ラグ「さあ、どうだか」

壊すことなく進んでいくと、急に広い空間に出た。

その先には階段も見受けられる。

ラグ「やつと先に進めますね」

アリス「やつと来たわね！」

…まさかの再登場である。

階段を勢いよく下りてきて言ったはいいが、慣性の法則とか何とかのせいで、壁にぶつかっていった。

クレア「…」

俺「…」

ラグ「…大丈夫ですか？」

鼻を押さえているが、それでも血は止められない。

見るのに飽きたのか、電波少女はテレビを触りだしていた。(後書き)

無理やりにもクレアを出したい。

きっと偶然なのだろうが、電源ボタンを押して画面にアニメが映し出される。

アリス「よ、よくもやったわね！」

俺「…自爆だろ」

ラグ「自爆ですね」

アリス「うるさいっ！」

ラグ「賑やかな人ですね…」

…あれ？　そういえば、なんで上から来るんだ？

塔^{（タ）}に来る前に別れたはずなんだが…あれは？

ラグ「待ち伏せですかね。理由と方法は知りませんが」

俺「…お前さ、やっぱり俺の心読んでるよな？　そうだよな？」

ラグ「何の事だかさっぱりですが？」

俺「とぼけるなよ」

アリス「私を無視して話をするなあ！！」

きっと偶然なのだろうが、電源ボタンを押して画面にアニメが映し出される。

クレア登場なし。

それはもう、ロリなキャラがたくさん出てるアニメで・・・。(前書き)

アリスって名前、金髪キャラっぽいイメージ。

それはもう、ロリなキャラがたくさん出てるアニメで・・・。

クレア「・・・」

ラグ「はいはい、それで。どのような「用件」でしょうか？」

アリス「くたられ!!」

俺「呂律が回ってないぞ」

アリス「だ、黙れ!」

ラグ「もう少しポリウムを落としていただけませんかね？」

アリス「ええい、うるさいうるさい!!」

ああ、もう。誰か何とかして・・・。

俺「用件だけ言って帰れよ・・・」

アリス「だから何度も言ってるだろう! 死ねっ!」

俺「・・・ラグ」

ラグ「・・・はい」

剣が交わり合うが、前と進歩してる感じはない。

それはもう、ロリなキャラがたくさん出てるアニメで・・・。（後書き）

文章力も進歩している感じはない。

くたられ：「くたばれ」と打とうとして、タイプミス。そのまま採用。

俺「お前・・・何見てんの？」（前書き）

アリスの外見？

青目 or 黄色目（土色目）

特にどちらとは考えてないです。

俺「お前・・・何見てんの？」

俺「なぜ俺たちを襲ってくるんだ」

過程は面倒なので端折る。

アリスは縄で縛られ、地べたに座らされている。

アリス「...ふんっ」

俺「こういう時にこそ喋れよ」

ラグ「仇討か、賞金目的か。はたまた操られているのか」

俺「...とことんメンドクサイ奴だな」

ラグ「まあ心を読んでしまえばすぐに分かりますが」

読んでいる最中なのだろうか。静かになる。

こちらからの質問以外では、ワーキヤーと騒いでいるアリス。

クレアは未だ喋ってない。

俺「お前・・・何見てんの？」（後書き）

腹がヤバい。腹痛とか、そういう問題じゃない。

友人「いや・・・別に・・・なにも・・・」(前書き)

アリスの外見？(身長)

クレア<アリス<俺 ラゲ

友人「いや・・・別に・・・なにも・・・」

ラグ「なるほど...そういう訳ですか」

俺「どういう訳ですか？」

ラグ「愉快犯みたいなものですよ」

アリス「なっ！　ちがつ...」

俺「お前は黙ってる。で、愉快犯ってことは俺たちの怖がってる姿が見たかった。と？」

ラグ「そんなところです」

俺「じゃあコイツどうするんだ？　逃がしたら、また襲いに来るだろう？」

ラグ「それは殺せと言ってるのと同じじゃないですか？」

俺「そこまでは...」

ラグ「しかし、弱いとはいえ殺しに来た相手ですよ」

友人「いや・・・別に・・・なにも・・・」(後書き)

会話文しか書けない。

小説としてどうよ、これは。

どう見てもロリコンです。本当にありがとうございました。（前書き）

アリスの外見？（髪の毛の長さ）

腰まで、またはそれより少し短め。

順番的に髪の毛の次に紹介すればよかった…。

どう見てもロリコンです。本当にありがとうございました。

俺「まあ、そうだけどさ…」

ラグ「やられてからでは遅いですよ?」

俺「適当に痛めつけるだけでも…。っていうかお前、そんなに殺したいの?」

ラグ「そういうつもりで言っているではありません」

アリス「騙されるな! こいつは…」

ラグ「少しお喋りが過ぎますよ?」

瞬時に引き抜かれた銀の短剣は、的確に喉元の手前で止まった。

アリスの額から数本の汗が流れだす。

ラグ「大人しくしないと、次は痛い目に遭うと思っていてください」

どう見てもロリコンです。本当にありがとうございました。(後書き)

クレアの出番が…。

無口キャラは好きだけど、登場させるのが難しいです…。

電波少女はというと、そのロリアニメを觀賞している。(前書き)

アリスの外見？

アホ毛キャラ

なんとなくアホ毛キャラを出したかったです。

電波少女はというと、そのロリアニメを觀賞している。

？「そなたに『力』を授けよう」

ラグ「誰ですか」

アリス「誰だっ！」

…え…なにこの安っぽいRPGみたいな展開。

俺とクレア、絶句だともう。

姿の見えない謎の声。力を授ける？ やる気失せるなあ…。

？「アリス。その力で目の前の敵を切るが良い」

目の前が真っ白に光って、周りが一切見えなくなる。

徐々に元の明るさを取り戻した世界では、アリスは雰囲気的に様変わりしていた。

俺でも分かるくらい、異様なオーラを醸し出していた。

電波少女はというと、そのロリアニメを觀賞している。(後書き)

サブタイトル小説 お先真っ暗。

本文 5メートル先が見えてきた。

話の内容は分かっていないのだろう。(前書き)

アリスの外見？
つるぺた。

話の内容は分かっているんだろう。

アリス「…」

俺「お、おい…黙るなよ…」

ラグ「来ますよ。クレアさんと一緒に離れていてください」

1歩、また1歩と、ゆつくり歩を進めてくるアリス。

たった1歩のはずなのに、威圧感は何倍にも感じられる。

俺「逃げるぞクレア」

クレアの手を掴み、その場から走って逃げる。

もういつその事、塔から出てしまえばいいんじゃないか？

逃げると言われて逃げたものの…みなさんは覚えているだろうか。

そう。この階層は迷路なのである。

話の内容は分かっていないのだろう。（後書き）

そついやこれ、塔の中だったね。
忘れてた。

映像を見ているというより、画面を見ていると言った感じ。(前書き)

アリスの内面？(言葉遣い)

多少乱暴。そして声が大きい。

外見は…もう言うところないかな？

質問があれば感想へどうぞ。

映像を見ているというより、画面を見ていると言った感じ。

俺「迷った…」

クレア「…」

当然といえば当然な結果だ。

戦闘音が聞こえないということは、少なくとも近くではないのだから。

… 十字路だ。

右に行くか左に行くか、それとも真っ直ぐか…。

俺「どうするよ」

クレアは俺の左側で手を繋いで、相変わらず無表情でいる。

このまま迷い続けたらどうしようか。

俺「まあ、そんな時はそんな時か。よし右に行こう。右利きだから」

そこには下への階段が…。あるわけない。

主人公補正とか、くたばれ。

俺「さて、昼飯昼飯」(前書き)

アリスの内面？(性格)
男勝りだが優しい面も。

俺「さて、昼飯昼飯」

ラグ「どうしたんですか。来ないんですか？」

アリス「…」

ラグ「なぜ知っているのか分かりませんが、知っているのなら殺すまでです」

アリス「…」

ラグ「死ね！」

いつもの銀の短剣とは違う、赤い刀身をした両手持ちのクレイモア。

それを片手で振り上げて、アリス目掛けて振り下ろす。

が、刃が身を切るのではなく、相手のロングソードでガードされる。

ラグ「RPGですよ、分かってますか！」

すぐに剣を払い、再び最初の位置に戻る。

魚肉ソーセージ数本とカップラーメン2つをとって、少女の待つリビングへ向か

アリスの内面？（長所）

いつでも明るい。ムードメーカー的存在である。

チームワークに長ける。

魚肉ソーセージ数本とカップラーメン2つをとって、少女の待つリビング格に向かいよう！」

再びクレイモアを振り回し、アリスに急接近する。

しかし、全ての攻撃はロングソードで防がれる。

そのたびに金属音が響き、火花が飛び散った。

ラグ「当たってくれないと殺せないじゃないですか！」

クレイモアでの回転切りの衝撃により、攻撃は防がれたが大きく吹き飛ばされたアリス。

そのチャンスを逃すわけもなく、懐のポケットナイフを思い切り投げつけた。

魚肉ソーセージ数本とカップラーメン2つをとって、少女の待つリビングゲに向か

左右壁に囲まれた迷路の中で回転切りなんてしたら、きっと壁にぶつかると思っんだ。

一応言いますが、ラグは今も仮面してます。
そろそろ忘れてそうなので。

友人「なんでお前、断りもなしに持っていくの？」（前書き）

アリスの内面？（短所）

挑発に乗せられやすい。

言い換えると、なんでも言っ事を信じちゃう子。

友人「なんでお前、断りもなしに持っていくの？」

飛んで行ったナイフはアリスの腹の部分に刺さった。

アリス「…」

無言でそれを引き抜くと、何でもないうな顔で動きを止める。

ラグ「しぶといですね。いい加減、飽きてきましたよ？」

俺「おつかしいなあ…出口どこだよ…」

ラグ「えっ？」

俺「…えっ!？」

クレア「…」

ラグ「どうして戻ってきたんですか」

俺「いや、どうしてって言われても…って前! まえ!」

ラグが振り向くと、ロングソードを高々と振りかぶっているアリスの姿が。

友人「なんでお前、断りもなしに持っていくの？」（後書き）

1つ前の話に誤変換があつたので修正しました。

書き終わって、確認もせず投稿しているのだからね。
そういう割に、今回も確認してませんが。

誤字脱字がありましたら、言っちゃってください。

俺「おい。カレーとシーフード、どっちがいい？」（前書き）

アリスの内面？（コンプレックス）
胸の大きさ。

俺「おい。カレーとシーフード、どっちがいい？」

間一髪、直撃は避けられたが、ピキッという音を立てた。

ラグ「…」

俺「お前…お面が」

仮面の下にあったのは、真っ赤な目をしたラグの姿。

整った顔は、かなり俺のタイプだ。

ラグ「酷い事をします。見たくないのでしたら、どこかに行ってください」

言葉は聞こえていたのだが、俺の目はラグの顔に吸い込まれていた。

アリス「…」

ラグ「来ますよ」

再び剣が交わる音が聞こえてきた。

ラグ「あなた、死にます。いえ、もう本気で殺します」

俺「おい。カレーとシーフード、どっちがいい？」（後書き）

普段から素顔を晒さない（仮面か何かで隠している）

戦闘などで素顔が見えてしまう。

これがやりたくてRPG編を書きました。
もうネタがないです。

少女「・・・？」（前書き）

アリスの内面：何書こう？ 弱点？
耳。

今回グロ注意。耐性がない人は、次の話までお待ちください。
忘れていなければ、簡単なあらすじを書きます。

少女「・・・？」

一気に間合いを詰めたラグは、両握りでクレイモアを振った。

攻撃を防いだように見えたアリスの剣だったが、クレイモアはロングソードをへし折っていた。

そのままの勢いでクレイモアを振り回し、アリスの右腕、さらには左腕も切り落とした。

ラグ「もう剣は使えませんよ。さあ…死ね」

俺は硬直してほとんど動けなかったが、クレアの目の部分だけは無意識に隠していたようだ。

辺りに飛び散る大量の血液。

もちろんそれは、返り血となってラグを赤く染め上げていた。

アリスは痛みも無いようで、しかし、両腕をなくしたせいでバランスもないようだった。

ラグ「汚い臍物を存分にぶちまけて下さい。賤しい小娘め」
いや ガキ

1発目、脚に。 2発目、腹に。 3発目、顔面に。

そして4発目。もはや肉片と化したアリスを、内臓ごと薙ぎ払った。

壁に激突した肉片は、その衝撃で、まるで赤い花火が描かれたかのような絵を見せた。

白く見えるあれは、きっと背骨なのだろう。

その他にもいろいろなところに骨らしきものが見えている。

ただ、いくつも破片となって体の外に転がっているため、どこの骨までかは分からない。

返り血を全身に浴びたラグは、剣に付いた血を振り払い、こちらを向いた。

いつもは見えない、冷たくて満足げな笑顔だった。

銀色の髪から垂れるのは、目の色と同じ、アリスの血液。

ラグ「だから言ったじゃないですか。あっちに行けって。見てしまったからには、生かしませんよ……」

少女「・・・？」（後書き）

通常の3倍の尺でお送りしました。600文字。
こつという文章を書いていると、テンション上がるね。

眠気が吹っ飛びました。

俺「あー・・・分かんねえのか。じゃあシーフードでいいな」(前書き)

10秒で分かるあらすじ。

アリスぽこぽこ。ついでにラグの裏切り。

俺「あー・・・分かんねえのか。じゃあシーフードでいいな」

俺「はっ！？　ちょ、待て！」

ラグ「待ちません」

俺「逃げるぞクレア！」

俺はクレアを背負い、今来た道を駆け抜けた。

もちろん、どこに行ったら出口なのか、そんな事はわからない。

とにかく走るしかない。

どれだけ来たのか、都合よく行き止まりにはならなかった。

後ろから追ってくるような物音も聞こえない。

さっき見つけた階段を下り、迷路の階層から脱することができた。

ラグ「どうしていつも…こうなるんでしょう…。…お父さま」

両方にお湯を入れて、箸やら飲み物やらを準備する。(前書き)

ラグの事情が垣間見えたり見えなかったり。

両方にお湯を入れて、箸やら飲み物やらを準備する。

俺「いったい何なんだ、あいつは」

塔から抜け出すと、もうすっかり辺りは暗かった。

おまけに雨も降っていた。

俺「気候変化のあるRPG…ほとんどやったことねえな…」

この塔以外に雨をやり過ごせるような建物は、見た感じだと無い。

しかし、ここにはあいつが…。

雨の音に混じって、眠気を誘うような息遣いが聞こえてきた。

背負っているクレアの寝息だ。

俺「そーい、クレアの寝てる姿なんて初めて見るな」

雨が止むのを待つか…。

両方にお湯を入れて、箸やら飲み物やらを準備する。(後書き)

気候変化のあるRPGって何があるんでしょう？

そして待つこと2分45秒。

いやいやいや、俺たちを殺そうとしてる奴がいるのに、止むのを待つなんて馬鹿げてる。

雨に濡れてでも、とにかくここから離れることが最優先だろう。

俺「…ちよつと我慢してくれよ」

降ってくるものを防ぐ道具はなく、なるべく木の影を通りつつ移動を開始した。

行く当てもなく、金も持ってないが、町にでも行けば何とかなるだろう。

甘ったれた考えは、雨の中を走っていく内に、どこかに消えていった。

方向も距離も分らないのに…。

そして待つこと2分45秒。(後書き)

何だこれ。いったい誰が書いたんだ！
いつもの作者にこんな文章、書けるわけがない！

俺「はいよ、昼飯」

俺「ちょ…ちょい休憩…」

背中で寝てる奴、雨降ってる、寝てない、寒い、冷たい。

具体的な時間が分からないので、いつになったら夜明けなのか分からない。

とりあえず、順調に塔から離れているが、もう限界が近い。

村や町はまだ見えないし、雨宿りできそうな建物も見つからない。

少しでも雨を避けて休憩するために、木の下に座り込む。

クレアを降ろし横になる。

ちょっと目を閉じるだけ。

あいつが来ても逃げれるように閉じるだけ…。

俺「はいよ、昼飯」(後書き)

今日休みで3連休おいしいです。

マイページにサムネ飾ってみました。
サイトのURLから飛べます。

俺の隣に電波少女が座り、電波少女の向かい側には友人が座った。

当然のごとく、目を閉じるだけでは済まなかった。

初めから分かり切っていたフラグだ。

目を開けると、雨は止んで天から光が射していた。

クレアは先に起きていて、木にもたれて座っていた。

俺「大丈夫かクレア。寒くないか？」

クレア「……」

俺「……大丈夫そうだな」

地面はぬかるんでいたが、クレアの手を取り歩き出した。

方向音痴という訳ではないので、塔に戻るなんてミスはしなかった。

またクレアと2人きり。最初に戻ったみたいだ。

友人「さーと。いろいろ教えてもらいましょうかあ」

しかし、歩けど歩けど村すら見つからない。

洞窟らしいのは1つか2つほど見かけたのだが、そんなものに興味はない。

俺「どうなってるんだ…ここら辺は」

塔に来る前に、どこぞの村の宿に泊まったような記憶があるのだが…。

なぜその村にすら辿り着かないのだろう。

謎である。不思議である。不可解である。

クレア「…ノータリン」

俺「えっ！？ 喋った!？」

クレア「…」

俺「喋ったよね？ 今絶対喋ったよね！ しかもノータリンって!」

友人「さーてと。いろいろ教えてもらいましょうかあ」(後書き)

キヤアアアアアアアシャベッタアアアアアアアア!

俺「本人に聞けば早い。残り1ヶ月でどうなるんだっけ」

俺「無視は良くないと思うなあ。良くないと思うなあ、そういうの」

クレア「…」

俺「…」

クレア「…死ね」

何この子。暴言製造マシンの類ですか？

俺「なんで今まで喋らなかったの？」

クレア「…」

俺「1話で1回しか喋れないんですか？」

クレア「…黙れ」

もう嫌この子。

俺の脆いガラスのハートが、一瞬にして崩れていきそう。

ただでさえ急展開過ぎて壊れかけてるのに、どうしてこう追い打ちをかけるんだか。

俺「訳が分からないよ」

俺「本人に聞けば早い。残り1ヶ月でどうなるんだっけ」(後書き)

そつえば、ハロウィンネタとか書いてないですね。
去年も書いてないですし…。

そついった行事みたいなのは、あんまり書いてないね。

少女「水星の連中が攻撃を仕掛けてくる。私はそれを守るために2万4千光年離

1光年〓光が1年かかって進む距離。

光の速度〓30万km/s

光は1分で 300,000*60〓18,000,000km進みます。

1時間だと 18,000,000*60〓1,080,000,000km

1日は24時間なので 1,080,000,000*24〓25,920,000,000km

1年は365日なので 25,920,000,000*365〓9,460,800,000,000km〓1光年

その2万4千倍なので

9,460,800,000,000,000*24,000〓227,000,000,000,000,000km〓2万4千光年

となります。約23京kmですね。（計算が間違っていないければ）

少女「水星の連中が攻撃を仕掛けてくる。私はそれを守るために2万4千光年離
ていた。
欠片も残らないくらいに砕けたハートでも、村を探して歩き回っ

そうして、何話越しかに見つけた、きつたねえ村。

人がいるのかどうかも怪しいが、とりあえず休むことにした。

いろんな箇所には隙間はあるし、非常に埃っぽい。

何度も呼びかけてはみたのだが、やはり人はいないようだった。

なのでこうして自由に使わせてもらっている。

ベッドに乗ると、訳の分からん気持ち悪い虫がうじゃうじゃ出て
きた。

人が休むところじゃねえよ。

少女「水星の連中が攻撃を仕掛けてくる。私はそれを守るために2万4千光年

無駄に計算しました。

それだけで20分以上の時間を使っています。

（小説を書いていた時間は5分ほど）

友人「・・・」(前書き)

前回の前書きからの続き。

2万4千光年(約23京km)というのは、あまりに桁が大きすぎて分かりにくいと思います。

なので今日は、具体的にどれくらいなのか紹介したいと思います。

(例1) 地球から冥王星までの距離の場合。

地球から冥王星までの距離は、約54億kmあるそうです。

2万4千光年は約23京kmなので、それを計算していくと・・・。

230,000,000,000,000,000 / 5,400,000,000 = 42,592,592.6

これをさらに2で割ります。すると・・・。

42,592,592.6 / 2 = 21,296,296.3

つまり、地球と冥王星を2129万6296.3回往復した距離と同じという事ですね。(計算が間違っていないければ)

友人「・・・」

クレア「…換気」

俺「はい」

クレア「…掃除」

俺「はい」

クレア「…肩」

俺「はい」

クレア「…寒い」

俺「はい」

クレア「…飲み物」

俺「はい」

クレア「…虫」

俺「はい」

クレア「…近づくな」

俺「…はい」

クレア「…死ね」

俺「…」

何なんだよ、何なんだよ。こいつはいったい何者なんだよ。

何で俺は従ってるんだよ。奴隷じゃないぞコンチクショウ。

俺「今日はよく喋るんですね。ロリサドさん」

クレア「…」

何なんだよ、何なのコイツは。

友人「・・・」(後書き)

ちなみに作者は宇宙オタクとか、宇宙マニアとかではありません。
ただ計算したくなるんです。
そういう無駄なことだけ理系脳なんです。

少女「地球を守るために、あなたにも手伝ってもらおう」(前書き)

前回と前々回の前書きからの続き。

桁が大きくて分かりにくいから、具体的に例えてみよう第2弾です。

(例2) 銀河系。

こちらは少し想像しにくいかもしれませんが。

銀河系の直径は、約10万光年だそうです。

半径にして、約5万光年。

少女が言うのは2万4千光年なので、さらにその半分くらいですね。意外と離れていないのかも。

ちなみに宇宙の大きさ(理論上で観測できる大きさ)は、約460億光年らしいです。

少女「地球を守るために、あなたにも手伝ってもらおう」

俺「掃除終わらねえよ」

吐いても吐いても…いやこれ違う。掃いても掃いても埃が登場し
てきやがる。

この家には埃製造機が隠されているんですか？

ずっとこんなところにいたら、肺炎とかその他諸々、絶対に体に
良くない。

もっとうとう…あつという間に綺麗になる魔法とかないかしら。

そう言つと、家が爆発した。

表現が雑だとか、手抜きだとか、小学生だとか言わない。

超展開なのは分かっているし馬鹿げているが、爆発したのだ。本
当に。

少女「地球を守るために、あなたにも手伝ってもらっ」(後書き)

今回、前回、前々回とやってきた宇宙ネタですが、ほとんどWikipediaで調べ上げた数字などを元にしております。
計算は、皆さんお馴染みのGoogle先生です。

俺「・・・と、いつごろしい」

時間を少し戻し、塔の中のラグさん。

ラグ「・・・」

吹き飛ばしたはずのアリスの残骸は消えており、血痕だけが残っていた。

そんな中彼女は1人、階段を上っていった。

迷路であつたフロアを抜けると、そこはまたも迷路であつた。

ひんやりと冷える壁にそつと触れると、手に付いた赤い血が痕を残した。

非常に静かな空間を歩くたび、自らの足音が木霊こだましていった。

まるで、今までの事などなかったかのような、怖いぐらいの静けさ。

俺「・・・といつことらしい」(後書き)

ここから先は、真面目な部分が続く可能性が予想される可能性があります。

少女「すでに奴らの攻撃は始まっている。知らないと思うが、世界各地で些細な

迷路の突き当りに着くと、壁に当てた手を強く押した。

まるで薄いガラスのように、石造りの壁は壊れてしまった。

ところどころに設置された松明が、ラグの顔を冷たく照らした。

その後も次々と壁を壊しながら進んでいき、ついに塔の外壁まで壊した。

暗く、雨が降っていた。

すぐ先に足場はなく、木々が並ぶ草原のフィールドが真下に存在していた。

塔の外に足を投げ出す格好で、その場に座り込んだ。

雨の音が静かにラグを包んでいった。

少女「すでに奴らの攻撃は始まっている。知らないと思うが、世界各地で些細な

シリ阿斯に見える？

これ、何も考えてないんだぜ？

後の事も先の事も、何も考えてないんだぜ？

俺「・・・それは初耳なのだが」(前書き)

さあて、どついう展開に持っていくのか…。

俺「・・・それは初耳なのだが」

小さな声で、何かを呟き始めた。

雨の音にも負けるような、細くて弱い、小さな声。

彼女にとって、とても大切な歌だった。

どこから取り出したのか、自分の隣に頭蓋骨を置いた。

雨は依然として止まない。

置いた頭をそつと撫で、歌い続ける。

意味もない、その歌を。

ラグ「昔ね…教えてもらったんですよ」

誰に語りかけているのか。

周りに人影は見えない。

そう言った声も、雨の音に消えていった。

ラグ「…ほとんど忘れてしまいましたが」

俺「・・・それは初耳なのだが」(後書き)

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/80441/blogkey/292999/>

ヤンデレ料理会場。興味がある方どうぞ。
グロ注意。

少女「こちらでも早く対処していかないと、地球は木端微塵。跡形もなくなる」

場面はラグからクレアたちに。

少女「こちらでも早く対処していかないと、地球は木端微塵。跡形もなくなる」

クレア「…」

俺「…」

元からボロかったが、もはや何もなくなってしまった。

せつかく掃除していたのに、それを一瞬で綺麗にしてくれたようだ。

俺「…誰だよ」

クレア「…違う」

まあ確かに、クレアがやる理由がないし、そもそも出来るのかどうか。

俺「じゃあ一体誰だ」

クレア「…知らない」

土煙と埃が治まり辺りを見渡したが、やはり誰もいない。

…というか、よく生きてたな。

俺「魔法なのか？ 誰が何のために？」

クレア「…知らない」

少女「こちらも早く対処していかないと、地球は木端微塵。跡形もなくなる」

RPG編が始まってから100話を超えてました。

20,000文字以上書いてるんですね…。

少女の妄想はどんどん大きくなっているようだ。

クレアが俺の服を掴んできた。

何事かと思いクレアの方を見ると、ある一方を指差していた。

俺「何かあるのか？ 何も見えんぞ」

その方向には木々があるだけで、特に変わった物は無いように思える。

しかしクレアは、その一点だけを指し示して動かなかった。

どれだけ目を凝らしても、俺の視力じゃ何も分からん。

近づこうとしても、クレアが服を引っ張り邪魔をする。

俺「どうしろと言っんだい？」

クレア「…待て」

待機するみたいですよ。

少女の妄想はどんどん大きくなっているようだ。（後書き）

ルビについて。

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/80441/blogk
ey/294490/

友人「すごい設定だね。そういえば、名前は何ていうのかな？」

クレア「…来る」

何かが来るらしいですよ、皆さん。

暗い木陰から出てきたのは、人間みtainな人型。

徐々に近づいてくるにつれて、俺の中の記憶が蘇^{よみがえ}りそうになる。

あれは…確か…。どこかで見た覚えはあるのだが…。

ミニナ「あー！ あんた！！」

俺「…どちらさん？」

ミニナ「よくも洞窟に置いて行つたわね！！」

俺「ああ…お前か…。帰れ、くたばれ、地獄に落ちろ、生き返ってくんな」

皆さんは彼女を覚えているだろうか？

友人「すごい設定だね。そういえば、名前は何ていうのかな？」（後書き）

ずいぶん前に出てきた人です。

102話あたりです。

少女「・・・」

ミミナ「再会しといてそれ!？」

俺「会いたくなかった」

ミミナ「まあ、いいわ! それよりクレア! ようやく見つけた!
」!

…? なぜクレアの名前を知っているんだ?

もはや嫌な予感しかないのだが。

クレア「…帰れ」

ミミナ「姉に対してその態度は良くないわよ」

俺「ああ…やっぱりね…。嫌な予感は当たってたのか」

ミミナ「思ってることが口に出てるわよ、馬面」

俺「誰が馬面だ。顔面偏差値20のくせに」

クレア「…あいつ…倒して」

少女「・・・」(後書き)

I w a n n a b e t h e a n o t h e r

是非一度体験してみてはいかがでしょうか。

友人「無いのか？　じゃあ名付けてあげよう！」

俺「倒してって言われてもなあ……」

ミミナ「おい」

俺「すっこんでろ顔面凶器」

クレア「……倒して」

俺「……。せめて武器があれば……」

ミミナ「おい聞け」

俺「出てくんな肉戦車」

クレア「……」

俺「黙られても……」

ミミナ「遮るんじゃないねえよおお！……」

俺「はいはい鳴かない吠えない話さない。うるさいから黙ってる」

ここまで一切、ミミナの方を見なかったのだが、何やら変なおー
うを出していた。

これは嫌な予感がプンプンするぜ（2回目）

友人「無いのか？　じゃあ名付けてあげよう！」（後書き）

ミニナ豹変。

いつぞやのアリスと同じ展開。

俺「やめとけ。悪いことは言わない。やめとけ」

俺「戦えって言うてもな、仮にも女だし…」

言い終わるのが少し早かった。

俺の顔の横を、何か細長い物が飛んで行った。

ミミナ「次は外れない」

俺「…え？」

前方に立つ奴は、俺には弓を構えているように見えた。

クレア「…アーチャー」

俺「それを先に言おうか」

近距離なら素手のが強いつてこと知らないのか？

そんな考えをしていると、奴はまた射撃体勢に入った。

俺「零距离とか勘弁だぜ」

どうしていきなり零距离にいるのでしょうか。

俺「やめとけ。悪いことは言わない。やめとけ」(後書き)

三

三

ナ、襲来

友人が俺に抗議している中、電波少女は音を立てながら麵をすすっていた。

（前

祝200話。

話を少し広げ過ぎた気がする。

友人が俺に抗議している中、電波少女は音を立てながら頬をすすっていた。

俺「むぬああああ!!」

その後は、まるでスローモーションのようでした。

いや、スローモーションでは言い表せない何か、だったかのように思えました。

零距离で構えられた矢の先端は、しっかりと俺の喉を狙っていたのでありました。

一瞬の内に走馬灯が流れ始めました。

クレアと出会った時の事。ラグと会った時の事。覗いた時の事。

ミミナはゆっくりと矢を放ちました。

痛さを味わう時間ありませんでした。

俺「…あれ？ 痛くない」

友人が俺に抗議している中、電波少女は音を立てながら麵をすすっていた。

（後

瞬間、
命、
助かり

俺「・・・ウマいか？」（前書き）

後書きにてお知らせ有。

俺「・・・ウマいか？」

矢の刺さった痛みはなく、代わりに軽い鈍痛が体を駆け抜けました。

俺は地面に倒れていたのです。

しかし、俺は自分で倒れたわけではありませんでした。

クレアが押し倒したわけでもありません。

俺の目線の先には、ムチムチとした太ももがあったのでありました。

さらに視線を上げると、背中に黒いコウモリみたいな羽がついています。

その羽と同時に見えたのが、黒くて長い髪の毛でした。

？「間一髪！ 怪我、してなさそうだね。大丈夫」

俺「・・・ウマいか？」（後書き）

この『？』の名前を募集したいと思います。

名前は響きで決めるので、名前の理由や外見、種族は関係ないです。

では、名前の条件を簡単に説明します。

・カタカナ

・2～5文字

一人何回でも、何個でもどうぞ。

ネタでも大歓迎です。採用はしませんが、作者が個人的に楽しみます。

少女は、熱さを感じていないかのように、冷まらず一気に食べている。(前書き)

作者は猫舌なので、冷まらず食べるなんて無理です。

少女は、熱さを感じていないかのように、冷まらず一気に食べている。

何者かも分からない、どこから現れたのかも分からない。

どうして俺を助けてくれるのかも分からない。

ただ、少なくとも俺の敵ではないようだ。

ミミナ「別にその男に用はない」

俺「用がないなら襲うなよ」

ミミナ「クレアを渡せ」

クレア「嫌」

俺「だとさ。お前に渡すわけにはいかないな」

登場したばかりの、吸血鬼みたいな奴を置き去りにして、話が進んでいく。

？「私の事はお構いなく」

ミミナ「嫌なら力づくで連れて帰る！」

友人「まだ重要な質問が残ってるのよお？ 聞いてるう？」（前書き）

話が進まない。どうしよう。

友人「まだ重要な質問が残ってるのよあ？ 聞いてるう？」

もうホント、分からないことだらけだよ。

アーチャー vs 吸血鬼？ のバトルが、目の前で繰り広げられているんです。

そのバトル中に、何やら拾える会話が聞こえてくるので、それを繋げてみると。

クレアはミニナの妹。

ミニナはクレアを連れて帰ろうとしている。

ミニナは魔法も使える。

俺でさえ話についていけない。

木陰からバトルを見ることができない。

俺「この間に逃げようか？」

服を離してくれないって事は、逃げられない戦闘か。

友人「まだ重要な質問が残ってるのよお？ 聞いてるう？」（後書き）

戦闘シーンが書けねえ…。

技量がねえ…。

俺「聞いてないし聞きたくない」(前書き)

やっぱり…無理だったよ…。

(戦闘シーンの意味で)

俺「聞いてないし聞きたくない」

結果だけ言うと、謎の吸血鬼の勝利に終わった。

顔面ミンチは弓矢を取られ、仰向けに倒されている。

魔法が使えるといった割には、今は魔法を使ってこない。

俺「ご自慢の魔法はどうした？　かかって来いよ」

ミンチ「…くっ」

クレア「…魔法…体…上限」

俺「よし、分かん」

？「身体能力を上げる魔法だけみたいねえ。それも、制限があるみたい」

肩で息をしている顔面戦車は、つまるところ、もう魔法は使えないようだ。

俺「ザマーミロ」

俺「聞いてないし聞きたくない」(後書き)

近々、サークル活動を始めます。

といっても、ただ友達と小説を載せるだけです。

アカウントは作ってあるので、もうしばらくしたら公開します。

友人「その子は誰の子なんだ」(前書き)

後書きにてお知らせ有。

友人「その子は誰の子なんだ」

俺「さあ吐け。今吐け。全部吐け」

？「なぜクレアさんを連れて帰ろうとしたんです」

ミミナを縛り座らせているが、下を向いたまま答えやしない。

俺「戦闘前の威勢の良さはどこにいったんだ」

一発くらい殴ってやらんと気が済まない。

しかし、飯にはいえ女性。さすがに手を上げるのは…。

そんなモヤモヤした戸惑いの中、何やら鈍い音が聞こえてきた。
ついでに声も。

？「黙つてると良い事ないですよ」

座っている奴を蹴ってやがる。

友人「その子は誰の子なんだ」（後書き）

サークル活動始めました。

サークル名：O・L・

現在、参加者募集中です。少しですが作品を上げているので、遊びに来る感覚で気軽にどうぞ。

<http://mypage.syosetu.com/193201/>

俺「強いて言えば・・・俺の子？」（前書き）

グロもいいけど、リヨナもいいよね。

俺「強いて言えば・・・俺の子？」

俺「何蹴つてんの!？」

？「人型をした何かです」

太ももを蹴られたミミナは、呻き声を上げながら必死に逃げようとしていた。

しかし、縛られているためにうまく逃げれず、芋虫のごとく地面を這っている。

それを何の躊躇^{ためら}いもなく蹴り飛ばす吸血鬼。

？「ほらほら、吐かないんですかあ？」

笑顔で蹴るのをやめない。

俺「…あんまりやると死んでしまいます」

クレア「…」

ミミナ「ぐがつ…げ…ば…」

誰も止めないのはなぜだ。

俺「強いて言えば・・・俺の子？」（後書き）

「耳たぶかゆ…」と思って掻いてたら、指が真っ赤になった。

『パソコンやってたら後ろにいた』なんて、信じてもらえないだろう。

俺「ストップストップ。話せるもんも話せなくなる」

？「仕方ないですねえ」

笑っている糸目が、残念そうに下がっていった。

紫色に変色しつつある足を見ながら、ミミナを座らせた。

俺「まだ話さないつもりか？」

ミミナ「…」

？「足がウズウズしてきましたわ」

俺「湿布でも貼っとけ」

クレア「…拷問…してくる」

俺「クレアにか？」

クレア「…」

俺「気が変わった。やれ」

？「はいな」

ミミナがこつちを睨んだような気がしなくてもない。

その後も友人の質問は続いたが、ほとんど無視して昼飯を食べ終えた。

先程とは違い、腹にも蹴りが炸裂した。

俺「思い知れ！　これがクレアの受けた痛みだ！」

何をされたかなんて知らないが、主人公っぽいカッコイイ台詞。

言ってみただけ。

この吸血鬼の蹴りも一段落ついたところで、ミミナ顔面重火器を置いて先に進んだ。

俺「…いや、お前誰だよ」

？「私は私ですよ」

羽をパタパタと動かして、糸目で笑って見せた。

傲慢なのか、豊かな胸を両手で揺らす。

俺「その羽って事は、吸血鬼なのか？」

その後も友人の質問は続いたが、ほとんど無視して昼飯を食べ終えた。

（後書き

Ｃ言語勉強したい。

Ｃ言語勉強して、おじやる丸の格ゲー作ってみたい。

食べ終えても、時間は嫌というほど余っている。

？「ん」。近いですけどハズレです」

俺「じゃあなんだ」

？「夢魔って知ってます？ 淫魔とも言いますよ」

俺「…サキュバスか」

？「ご名答」

そう言つと、地面から浮いて見せた。

おまけに空中2回転も見せた。

ひらりとした短いスカートがめくれ、何も穿いていないのが分かった。

俺「穿いてな…えっ!？」

見てしまったからにはしょうがない。男の性だ。

？「もちろん、わざとですよ」

さすが淫魔、汚い。男を扱うのに慣れてやがる。

食べ終えても、時間は嫌というほど余っている。（後書き）

このサキュバスの名前が、未だに決まっていないという事実。

現在の作者の状態は「雨流みねね」または「見崎鳴」。

友人「・・・月曜」(前書き)

話の方向が分からなくなった。

友人「・・・月曜」

俺「えっと・・・それは？」

？「生えてないのが好きなんですねぇ？」

クレア「・・・変態」

俺の意思とは裏腹に、俺の息子が上がりかけていた。

甘いような匂いが鼻を突き抜けている。これも原因の一つだろう。

たぶんこいつの仕業だ。

男を誘惑する淫魔の香り。ありそうで怖い。

などと考えているうちに、だんだんと熱っぽくなってきているのが、自分でも分かる。

主に顔が。

ここは一つ、話題を変えないと・・・。

俺「な・・・名前は」

？「ヴィロメリア」

友人「・・・月曜」(後書き)

名前の由来。

「ヴィ」を使いたい + 名前ジェネレーターで出た「メリア」
+ 響きの「ロ」

ちなみに、プルメリアっていう花があるらしいです。

俺「早まるな。時はまだ日曜なり」(前書き)

工口展開は需要ないのか？

それでも作者は需要なんて考えないので、そのつもりでお願いします。

俺「早まるな。時はまだ日曜なり」

俺「え…？ ビラビラが…何だって？」

ヴィロメリア「まあ。如何わしいですわね」

サキュバスは上品に笑い、そのデッカイお胸を擦り付けてきた。

もう我慢ならん。はち切れそうだ。おもに下が。

俺「あ…う…う」

ヴィロメリア「耐えるのは体に良くありませんわよ」

脳みそがフットーしそうな状況の中、ある一つが俺の脳を凝固させた。

クレアが…クレアが物凄い軽蔑している気がする。

顔自体は無表情なのだが…なんというか…雰囲気が。

俺「早まるな。時はまだ日曜なり」(後書き)

ヴィロメリアって長いね。

文字稼ぎにはちょうどいいけど。

略称でも考えるか…。

時はまだ昼過ぎ。今日という日は、まだ12時間ほど残っている。

俺とクレアの、その微妙な関係のまま旅は続いていた。

ヴィロメリアと名乗るサキュバスには、『ヴィリア』という略称をつけた。

大して変わってないとか、そういった文句は一切受け付けません。

そうして、平和な旅はいつまでも続くのだった…。

俺「終わらないよ」

と冷静さを保っている主人公であるが、実は余裕などほとんど無い状況に置かれていた。

時は夜。

月が静かな夜。風は冷たく吹いていた。

ようやく見つけた一軒の宿屋だった。

時はまだ昼過ぎ。今日という日は、まだ12時間ほど残っている。(後書き)

クリ スまで、あと1ヶ月…。

まだ大丈夫…まだ大丈夫だから…。

先の事を考えたら負けだ。鬱だ。

あまり贅沢は言えないのだが、それでもこれはない。

そう、主人公は考えていた。

俺「水、出る？」

クレア「…大丈夫」

俺「ベッドは？ 虫とか出てくるんじゃないか？」

ヴィリア「大丈夫ですわよ」

外観はお世辞にも綺麗とは言えない。

『趣がある』とか『風情がある』とか、そういったレベルではなかった。

しかも、村の中にあつた宿屋ではなくて、この宿屋だけがポツンとあつたのだ。

俺「宿代はしっかり取られるしな」

クレア「…手伝う」

先の事を考えたら負けだ。鬱だ。（後書き）

そんなことより、世にも奇妙な物語見ようぜ！

前の日と同じように、何をするわけでもなく、無駄に時間は過ぎていった。

しばらく使われてなかったかのような部屋を、3人で軽く掃除する。

ベッドが2つしかないため、3人目の人はソファで寝ることになる。

クレア「…」

ヴィリア「…」

俺「…」

さて、楽しい楽しいお風呂の時間。

前回も似たような事をした気がするが、今回は相手が違う。

それに、2つの大きな宝の山が存在している。

部屋にテレビなどの音の出る物は存在せず、シャワーの音と2人の声が聞こえてくる。

相手はサキュバス。やるっきゃない！

前の日と同じように、何をするわけでもなく、無駄に時間は過ぎていった。

（後

静岡県静岡市に行ってきました。

もしかしたら作者を見た人がいるかもしれませんね。

登呂遺跡にいたのが作者です。

トロベーかわいいやん…。

気がつけば外は暗くなっていた。

風呂場のドアに耳を押し当てると、定番なアレの会話が聞こえてきた。

前はミスったが、今回はきっと大丈夫だ。

どこからともなく湧いてくる自信が、俺をさらにアクティブにさせた。

温かく湿った蒸気に乗り、石鹸のいい香りが鼻を貫いていく。

どうしようもなくなった俺の体は、いつの間にか、そのドアを開けていた。

ヴィリア「あら。いらっしやいませえ」

ちょうど体を洗っていたヴィリアに、体当たりでもしていくかのようだった。

未だに友人の家に張り付く俺たち。(前書き)

またもクレア空気。

未だに友人の家に張り付く俺たち。

柔らかい、例えるなら人肌に熱したマシユマロのようなものが、俺の頭を包み込んだ。

そのまま『ぱふぱふ』され、全身の力が抜けていくようだった。

ヴィリア「どうですか？ もっと私にされたくないですかあ？」

答えるよりも先に、俺の服がヴィリアの尻尾で優しく破かれていった。

肌を切り裂かぬ程度の力加減…。

さすがサキュバス。手馴れている。

そんな冷静な考察なんかしていなかった。

この先にある事しか考えてないに決まってる。

未だに友人の家に張り付く俺たち。 (後書き)

ぱふぱふ…。

何と良い響きなんだ…。

ぱふぱふ…。

ひらがなのポイントですな…。

俺「そついやさ、何もしないの？」

ヤバイ…我慢できん。

上は完全に破かれ、尻尾は下へと向かっていた。

俺の顔は、未だに濡れたマシユマロに包まれている。

ヴィリア「ほらほらあ、我慢なさらずに」

「どーにでもなれー」な状態から、俺を救い出す…いや、現実へと引き戻す事が起きた。

俺の顔に大量のお湯が掛けられた。

しかも、何回も。

ヴィリア「あらあら」

上品っぽい笑い声をあげ、俺は床へと落とされた。

目から星が出るかと思うほどの衝撃が、頭を駆け巡った。

俺「そっぴやさ、何もしないの？」（後書き）

もう11月も終わり…か。
なんだか早いですね。

少女は答えなかった。いや、考え中といった方が正しいだろう。

俺「嫉妬か！」

お湯の次は風呂桶が飛んできた。

クレアの感情が垣間見れた気がしなくてもないが、それは本当に一瞬だった。

桶が狙った先は、俺の頭。

つまり、そのままばたんきゅー。

気を失ったのだが、一瞬でも俺は男だった。

クレアの小さなまな板を拝めた。それだけで、もう満足であります。

再び床に倒れていき、頭を強打したらしいのだが、もはや記憶になかった。

そのまま床を血で染めて、いろいろと大変だったと後から聞いた…。

少女は答えなかった。いや、考え中といった方が正しいだろう。(後書き)

授業で必要な資料16枚を印刷したところ、表は綺麗に印刷できているのに、裏が真っ黒になるという謎の現象が起こった。
しかも、影響を受けたのは7枚か8枚ほど。

もうすっかりその設定を忘れていたのだろっ。

いい匂いが俺の鼻をくすぐった。

ゆっくりと体を起こし、テーブルの上に並んでいるそれを見た。

木の器に入ったキノコスープに、コッペパンみたいなものが並んでいた。

俺の分も。

ヴィリア「あらあ、お目覚めかしら」

俺「あ…ああ…」

頭が痛む。ズキズキと自己主張を繰り返していた。

なんとか我慢しつつ、食事を…。

俺「…スプーン的なものはないの？」

クレア「…手」

お前らはスプーン持ってるじゃないですか。

突っ込むのも面倒だ…。

もうすっかりその設定を忘れていたのだろう。(後書き)

そんな事よりルパン見ようぜルパン。

数十秒の間があった後で、思い出したように口を開いた。

仕方なく、器を傾けて直飲みする。

ヴィリアが笑った目でこちらを見ている気がするが、きっと気のせいだ。

気のせいに違いない。

3人とも食事を終えるが、特に何もすることはない。

窓から見る風景も、木々と月が見えるのみ。

面白そうな建造物も、行ってみたいと思うようなものもない。

明日また歩いて冒険だなんて面倒になってきた。

遠い目で外を見てみると、ヴィリアが耳打ちしてきた。

ヴィリア「サキュバスの食事って知ってます？」

数十秒の間があった後で、思い出したように口を開いた。（後書き）

すみません。

G T A ? やってたら、すっかり忘れてました。

でも日付変わってないから O K だね…？

追記：頭が痛い。たぶん寝れば治ると思う。

少女「き、金星の・・・」

俺「食事って…今食ったじゃねえか」

ヴィリア「うふふ…」

謎の笑いを見せ、ベッドへと向かっていった。

時間はまだ早いのだが、何回も言うように、することがない。

眠たくない目を擦りながら、俺もソファーへと向かった。

クレアはもう寝ているようだ。

小さな寝息が聞こえてきた。

ソファーに寝そべって、どれくらい過ぎただろうか。

目を瞑ってても、一向に寝れる気配がない。

俺「疲れてねえのかな…。そんな訳はないと思うんだが…」

少女「き、金星の・・・」(後書き)

忘れないように予約予約と…。

友人「さっき水星って言ってなかった？」

目を開けてみるが、景色に変わりはない。真っ暗になってるだけだ。

もう一度目を瞑り、妄想の世界へと入っていかうとする。

しかし、それを阻止するものが現れた。

俺の寝ているソファーに、誰かが潜り込んできてるような…。

するりと侵入してきたものは、ちょうど俺の息子の位置で止まった。

訳の分からない状況だが、体はとっさに退避行動をとった。

勢い余ってソファーから落ちていった。

ヴィリア「そんな怖がらずにい、私に任せて」

俺「言ってやるな」

俺「な、な、なんだよいったい。こんな時間に」

ヴィリア「言っただでしょう？ サキュバスの食事ってえ」

俺「ど、どういう事だよ」

ヴィリア「あら。本当に分かっていますの？　じゃあ説明してあげますわあ」

説明というのは、口でしないらしい。

いや、ある意味で口でしているのか。

ネットリとした物が絡みついて、それはもう異常なまでのエロ스가…。

具体的に書けないのが非常に残念だが、この夜起こったことはしばらく忘れそうにない。

俺「言ってやるな」(後書き)

私が書いた中で、この作品が歴代1位のアクセス数に。
ユニーク数はまだ3位か4位くらい。

サキュバスが登場するエロ小説も書こうか悩む…。

いつもの顔より、誰が見ても赤くなっているのが分かる。

朝になった。

ヴィリアは自分のベッドに戻っており、俺もいつの間にか眠っていたようだ。

窓から朝日が差し込んでおり、清々しい気分になれるようだった。

ヴィリア「顔が間違ってますわよお」

耳元で囁かれ、軽く前方へと跳びはねる。

俺「お、おま…」

振り向くとクレアも立っていた。

ヴィリア「一緒にシャワーでも入りますかあ？」

クレア「…嫌」

さっさとクレアは行ってしまい、ヴィリアも風呂場へ行ってしまった。

俺「何だったんだ」

いつもの顔より、誰が見ても赤くなっているのが分かる。（後書き）

スカイプで4人と通話しながら書きました。
ネタが浮かばない浮かばない。大変。

俺「かわいいな、お前」(前書き)

後書きにて、死ぬほどどうでもええ事、書いてあります。

俺「かわいいな、お前」

3人とも支度を終え、さあ出発という状況。

と、簡単に1行で済ませているが、実はいろいろとあつたんです。

例えば、風呂あがって着替えているとヴィリアが…とか。

朝飯を食べているときに、俺だけスプーンが…とか。

大人しいのはクレアだけだったという。

さて、今度こそ出発。

埃くせえ宿とは、これでオサラバ。

次はいつ宿に泊まれることか…。

俺「俺の人生、晴れ時々大荒れ…」

晴れ晴れとした天気は、絶好のピクニック日和だった。

俺「かわいいな、お前」(後書き)

【執筆時間簡易計算】

あくまで目安です。そして、私の執筆時間です。
他人には使えませんので、ご注意ください。

計算式

小説の文字数÷500×30

ネタがある時、ない時では、執筆速度が違ったため当てになりません。
目安です。

少女「き・・・金星も攻撃をし始めている」

俺「おやつは300円までだぞ」

クレア「...お金...ない」

ヴィリア「私のおやつは貴方次第ですわ」

俺「...」

非常に軽装備の中、ピクニックとは名ばかりの地獄の散歩が始まる。

当てもなく歩き回るといって、苦痛の時間が...

俺「なあ、どれくらい歩いた？」

クレア「...」

ヴィリア「ざっと10キロくらいかしら」

俺「3時間ほどか...」

こう書くと、3人とも歩いているように見えるだろ？

ヴィリアとクレア、歩いてないんだぜ！ 信じらんねえ！

少女「き・・・金星も攻撃をし始めている」(後書き)

そんな事よりラピユタ…見てないんだぜ？

それから、少女の設定のお話が、また始まった。金星も含めて。

俺「飛べるっていいよな」

ヴィリア「あら、あなたも跳べるじゃありませんかあ」

俺「意味が違うだろ」

ヴィリアはクレアを背負い、地面から数センチだけ浮いている状態。

必死に足を動かして、大地を踏みしめているのは俺だけなんだよ。クソが。

俺「飛ぶのって疲れねーの？」

ヴィリア「では、毎晩運動をするのは疲れますか？」

ラグ「…あの子たちは、大丈夫でしょうか？」

光射さぬ塔の中で一人寝転がり、暗い灰色の天井を仰いでいた。

それから、少女の設定のお話が、また始まった。金星も含めて。（後書き）

1日遅れのバルス!!

水星だけの時より、ボリユームが1・5倍くらいになった。

そうこうしているうちに、お天道様は真上までお昇りになられた。

ある程度の木が生えていたので、その影で休憩をとることにした。

俺「め…飯とみ…ず…」

ヴィリア「私の唾液でも飲みますかあ？」

俺「ふ…ざけ…んな…」

弱い者を虐めて楽しんでいるようなヴィリアの表情。

クレアは無表情で水を飲んでいる。俺を無視して。

俺「し…ぬ…」

ヴィリア「どうぞ…自由にな…」

クレアにパンを渡すと、自らも食事を始める。

短い…命だったな。

水星だけの時より、ボリユームが1・5倍くらいになった。(後書き)

三槇子？ 四槇子？

バカジャーネーノ

外は暗くなって、ちびまる　ちゃんが始まる。

その後、ヴィリアのからかいも終わり、普通に飯を食うことが出来た。

しかし、もはや俺の足は岩石と化していた。

これ以上1歩も歩けない状態。

俺「…疲れた」

ヴィリア「がんばってくださいねえ」

クレアを背負い、俺を置いて飛んでいく。

1人ぽつんと残され、歩かざるを得ない。

また何もない、つまらないこのフィールドを歩く。

鬱だ。そうだ死のう。

俺「…」

ヴィリア「置いてきますよ」

それは置いていってから言うセリフではない。

外は暗くなって、ちびまる　ちゃんが始まる。（後書き）

Ｃ・Ｃ・に手コキしてもらった夢を見た。
もういつ死んでもいい。

少女は話し疲れたのか、ソファでグッスリしている。（前書き）

少し真面目で重要なお話あり。
詳しくは後書きで。

少女は話し疲れたのか、ソファでグッスリしている。

ラグ「さて…そろそろ行きましょうか」

立ち上がり、軽く体をほぐす。

目の前の大穴から見える広大なフィールドを眺めつつ、そっと1歩を踏み出す。

塔の穴の、限界ギリギリ。

緩やかな風が髪をなびかせた。

左腕を前に伸ばし、ニンゲンには理解できない言語で呪文のようなものを唱える。

そして1歩。塔の外へ。

瞬間。重力に引っ張られて、ラグの体は地面へと急接近する。

表情一つ変えず、まるで何事もなかったかのように、歩き出した。

少女は話し疲れたのか、ソファでグッスリしている。（後書き）

【小説・マイページ・活動報告の監視強化について】

要約すると、

「エロいこと書くな。歌詞もやめろ。やめねんなら、それなりの対処するんでヨロシク」
ということ。

この小説だと、サキュバスであるヴィリアに大きく影響します。
なので、ヴィリアのアレなシーンは読者さんの妄想力でカバーして
いただくことになるかと思っています。

小石とか空き缶とか投げないで！
わ、私は悪くないもん！

友人「で？ ホントのこと、どういふことなのよ」

血の付いた格好を気にしないで、クレア達が歩いていた方向へと。

後悔のような、懺悔のような表情で、ただ無心に。

風に揺れる髪が、冷たく舞っていた。

どこに隠し持っていたのか、前と同じ狐の仮面を被った。

誰にも見せない、自分の見られたくない過去。

それを隠すように。

ラグ「…同じ過ちは、犯したくない」

晴れ渡る日の光は、ラグを嘲笑っているように見えた。

ラグ「私は…『ラグ』なのですから…」

意味深な言葉だけを残して…。

友人「で？ ホントのこと、どういふことなのよ」（後書き）

伏線はないかと読み返していたら、5つほど見つかりました。

とりあえず、その伏線を回収するように書いていこうかと思っています。

（予定）

俺「ホントも何もねえよ。言っても信じないだろうしな」

俺「なあ」

ヴィリア「はい」

俺「ここはどこだ」

クレア「…お城」

ヴィリア「正確には城下町ですわねえ」

レンガ造りの家が立ち並ぶ賑やかな町。

賑やかなのは、カーニバル状態であるのも原因だろう。

家と家の間には糸みたいなものが張り巡らされており、そこに風船がいくつも括り付けられている。

何のお祭りなのだろうか。

町人「ようこそ。賑わいと活気の町、アリーラへ」

俺「賑わいと活気…ねえ…」

今にも音楽隊が出てきそうである。

俺「ホントも何もねえよ。言っても信じないだろうしな」(後書き)

作者のド下手な絵を、サークルで書いている小説の挿絵として使いました。

小説は私のではないのですが、見たいという方は、もうしばらくお待ちください。

友人「何を言っても信じる！ だから俺を信じる！」

軽く探索してみると、いくつもの宿屋を発見することが出来た。

しかし、どこも値段が高い。

まあ支払うのは俺じゃないんですけどね。

パレードのうるさにイラつきを覚え始めたころ、13件目の宿屋を発見した。

俺「もうここでいい…。ひっそりと静かに暮らしたい…」

ヴィリア「鬱になってどうするんですかぁ」

クレア「…バカ」

人の言う事なんて無視して、さっさと宿屋の中に逃げ込んでいく。

騒がしい。うるさい。もうイヤこの町。

友人「何を言っても信じる！ だから俺を信じる！」（後書き）

もくてきが あるって とっても すてきね。

俺「・・・もしかしてそれ、かつこいいと思うてるっ。」(前書き)

台本回。

俺「・・・もしかしてそれ、かつこいいと思ってる?」

部屋に逃げても、外のどんちゃん騒ぎからは逃げられない。

俺「あああああ・・・あああ・・・あ・・・」

クレア「・・・黙れ」

俺「ああ・・・。・・・あ?」

ヴィリア「どうしましたの?」

俺「突然、随分と前の記憶が蘇ってきた」

ヴィリア「その記憶とは?」

俺「天と地の交わる場所がどうか」

ヴィリア「天と地の交わる場所ですかあ?」

俺「クレアも聞いたよな」

クレア「・・・聞いた」

ヴィリア「その場所に何かあるんですかあ? お宝とか?」

俺「何だったかなあ」

友人「い、いいから早く話せよ」

クレア「…剣」

俺「そうそう、それ」

ヴィリア「と言われましてもお…心当たりなんかあ…」

当然、誰もその場所なんか知るはずもなく、聞き込み調査となった。

俺「ところでこのお祭り、いつまで騒いでるわけ？」

ヴィリア「もう随分と暗いですねえ」

時計に目をやると、8時半を過ぎたところだった。

俺「何のお祭りかも分からないのにな」

クレア「…聞けば」

そついうわけで、宿の中から聞き込みが始まる。

面倒くさいけど仕方ない。

友人「い、いいから早く話せよ」(後書き)

話の持っ*て*いき方が雑。

俺「・・・夢の中から出てきた」

俺「あの、すみません...」

爺「この町は変わった...。ワシが若かった頃は、たくさんの緑があったもんだ。知れ、若造よ...」

こりやハズレだよ...。1人目からハズレ引いちまったよ。

話長いからってボタン連打してたら、ミスってもう1度話かけちゃうパターンの奴だよ。

ヴィリアとクレアは一緒に行動しており、有益な情報があったのかないのか、数人に聞きまわっている。

爺「いいか。決して王様を怒らせてはならぬぞ。若者は礼儀を知らん」

俺「・・・夢の中から出てきた」(後書き)

話長くてボタン連打してたら、実は重要な事を言っていたりするパターンもあるよね。

友人「え？　もしかしてそれ、信じると思ってる？」

爺「そもそもこの町はな…」

俺「…」

いつになったら終わるの？　ねえ、いつになったら終わるの？

ヴィリアたちを見てみると、とつくに聞き込みを終え、離れたところで俺を笑ってやがる。

部屋の方を指差して、「先に戻ってろ」の合図を送る。

合図には従ってくれたのだが、嘲笑いながら戻っていったのが気に入らねえ。

あいつら、後で覚えてろよ。

爺「昔から奴は変わつとらん。人をか…」

俺「…」

話し始めて5分は過ぎていると思うのだが…。

俺「おーい電波少女、帰るぞー。起きろー」

爺「だいたいな、お前さんだって…」

俺「…」

ヴィリア「さて、部屋に戻って来ましたねえ」

クレア「…」

ヴィリア「彼が戻って来る前に、先にお風呂に入りましょうかあ」

クレア「…行く」

着替えとタオルを持ち、前よりは格段にきれいな風呂へと向かった。

部屋の風呂ではなく大浴場。さすが、無駄に高いだけはある。

ヴィリア「お風呂、楽しみですね」

クレア「…うん」

ヴィリア「小さなお胸を洗ってあげましょうかあ？」

クレア「…」

俺「おい電波少女、帰るぞー。起きろー」(後書き)

トリービアー。

友人「おまつ！ 何も話してないじゃないか！」

さて、服を脱いで中へと入っていくと、いくつもの浴槽が並んでいた。

熱いのから冷たいの。薬草風呂にフルーツ風呂。

ミルク風呂なんていうのもあるらしい。とてもイヤラシイ響きね。素敵。

2人がまず入っていったのは、何の変哲もない、ただの透明なお湯。

温度は40度くらいだろうか。

この何の変哲もない浴槽が一番大きく、2人のほかにも20人近くお湯に浸かっている。

そんな中、1人がゆっくりとヴィリアたちへと近づいてきた。

友人「おまつ！ 何も話してないじゃないか！」（後書き）

一昨日、WiiのバーチャルコンソールでカスタムロボV2を買いました。

やっぱりカスタムロボは最高だね。

ガトリングガン、ドラゴンガン、レイフォールガンは俺の嫁。

俺「話したよ。全部な。さ、帰るぞ。よだれ拭けよ」(前書き)

girls talk

俺「話したよ。全部な。さ、帰るぞ。よだれ拭けよ」

クレア「…」

ラグ「お久しぶりです」

ヴィリア「綺麗な体ですね」

ラグ「ありがとうございます。任務の方はきちんとやってくれますか？」

ヴィリア「はい。もちろんです」

クレア「…任務？」

ヴィリア「あなたと彼の監視と保護が私の任務です」

クレア「…？」

ラグ「得意魔法は召喚術です」

ヴィリア「そういうことです」

ラグ「この事は、誰にも言わないでくださいね。それではまたいつか。ヴィロメリアさん、クレアさん」

俺「話したよ。全部な。さ、帰るぞ。よだれ拭けよ」(後書き)

クリスマス小説が完成してない。

書き終わらないとカスタムロボできない…。

のっそりと起き上がった少女は、ゆっくりと俺に近づく。

どこかに行こうとするラグの肩を掴み、引き戻すヴィリア。

ヴィリア「まあまあ、そう言わずにい。せっかくなんですから、楽しんでしょよ」

これでもかというほど、ご自慢の胸を擦り付ける。

ラグ「…そうですか。それならお言葉に甘えて」

6つの大中小のお胸が湯船に浸かっていく。

たくさんのお風呂を楽しんだ3人に、とうとうお別れの時間がやってきた。

ラグ「今度こそ行かないといけません」

ヴィリア「了解です」

クレア「…」

のっそりと起き上がった少女は、ゆっくりと俺に近づく。(後書き)

Wiiの007のゲーム買いました。(買ってもらいました)
操作性が悪い気がしないでもない。

寝起きの少女を背負い、玄関へと移動する。

2人が部屋に戻ると、ベッドに1人の男性が倒れていた。

顔色が悪く、今にも死にそうな表情をしている。

ヴィリア「お疲れ様です」

クレア「…おつかれ」

俺「…」

ヴィリア「何か情報は得られましたかあ？」

俺「モウ ナニモ キキタク ナイノ。ネカセテ」

ヴィリア「お休みなさいませ」

クレア「…おやすみ」

まるで死んでしまったかのように存在感を消し、眠ってしまった。

ヴィリア「後で出番がありますので、よろしくお願いしますねえ」

寝起きの少女を背負い、玄関へと移動する。（後書き）

クリスマスはケーキをおいしく食べるための日です。

俺「タダ飯ありがとな。また食いに来るわ」

ヴィリア「…さてと、私たちはどうしましょうかあ？」

クレア「…ご飯」

ヴィリア「ですね。2人で食べに行きましようかあ」

静かにドアを開け、静かに出ていった。

晩ご飯は、宿の中にレストランみたいなものがあるらしく、そこで食べることに。

もはやここまで来ると、宿ではなくホテルである。

そのレストランの中に、ある一か所だけ人が集まっている。

まるで誰かを囲むように、円を成していた。

ヴィリア「なんでしょうねえ、あれ」

俺「タダ飯ありがとな。また食いに来るわ」(後書き)

クリスマスはもう終わった！

という訳で、バレンタインのヤンデレ企画を計画中。

出てから気が付く。晩飯をご馳走になってなかったことに。

近づいてみると、男性ばかり集まっているのが分かった。

隙間から見えるのは、どこか見覚えのある銀色の髪。

聞こえてくるのは、どこか聞き覚えのある女声。

ヴィリア「…何してるんです？」

ひどく呆れたのか、語尾を伸ばすような口調は消えていた。

その声に気付いたのか、中心にいた女性がこちらを向いた。

狐の仮面を被っているが…いや、被っているからこそ分かり易い。

仮面の彼女がこちらを向くと同時に、周りの男もこちらを見た。

出でから気が付く。晩飯をこ馳走になつてなかつたことに。(後書き)

よつやく〇〇七の操作に慣れてきた気がする。たぶん。

しかし、今から戻るのは格好がつかない。
(前書き)

サクシャ ハ コワレ チャッタ なの。

しかし、今から戻るのは格好がつかない。

ラグ「あ、どうも。こんばんは」

クレア「...」

ヴィリア「...」

男1「おい、あの姉ちゃんもなかなかだぜ」

男2「あつちの少女こそ...ウヒヒ...」

ヴィリア「ああん...視線がエロいですわよお」

スカートの裾を少し上げ、男どもを誘惑していく。

ヴィリア「はあい、ここまで」

男3「もつと見せろー!!」

男4「もう1回! もう1回!」

男5「ねーちゃん、俺とエロい事しようぜ!!」

一気にボルテージは上昇し、窓ガラスが急速に曇り始めた。

しかし、今から戻るのは格好がつかない。（後書き）

違法パーツまでの道のりが長い…。
敵も強くなってきたし…。

お金は家に置きっぱなしで、コンビニにも寄ることが出来ない。(前書き)

台本回。

お金は家に置きっぱなしで、「コンビニにも寄ることが出来ない。」

ヴィリア「もっと見せてあげてもいいけどお、条件があるわよお？」

男6「何でも言ってくれ！」

ラグ「あの…ヴィロメリアさん？」

ヴィリア「私たちい、ある物を探してますのお」

男8「どんなものだって俺っちにかかれば一瞬で！」

男9「乳の為なら！」

ヴィリア「天と地が交わる場所にあるっていう剣なんですけどお。情報だけでも結構ですわよお」

男10「任せな！　すぐ行くさ！」

ヴィリア「タイムリミットは明日の昼までですわよ」

お金は家に置きっぱなしで、コンビニにも寄ることが出来ない。(後書き)

違法パーツゲット。

ホムラガン、ジェノサイドボム。

超攻撃型。

仕方がないので、一旦家へと帰る。（前書き）

台本回。

仕方がないので、一旦家へと帰る。

クレア「…」

ラグ「…」

2人は軽蔑のような冷めた目線でヴィリアを眺めている。

男共は次々に夜の町へと飛び出していく。

ヴィリア「ちよろいですわねえ」

ラグ「…悪女になってませんか？」

ヴィリア「そうですかあ？」

クレア「…なんで…いる？」

ラグ「せっかくお風呂も入りましたし、休もうかと思ひまして」

ヴィリア「…アホの子ですよねえ？」

クレア「…アホの子」

ラグ「なんでそうなるんです…？」

ヴィリア「いやいや、だって」

仕方がないので、一旦家へと帰る。（後書き）

そろそろ真面目に書かないと。
目指せ、脱・台本回。

夜道を一人の男が、少女と手を繋いで歩いている。(前書き)

年末も休まず投稿(予約)

夜道を一人の男が、少女と手を繋いで歩いている。

ラグ「寝てるんですね？」

ヴィリア「はい」

ラグ「なので大丈夫です」

ヴィリア「会ってあげばいいじゃないですかあ」

ラグは答えずに、2人を座らせた。

ラグ「晩ご飯がまだなんですね？」

メニューを広げると、体面に座る2人に差し出した。

露骨に話題を変え、ほんのり湯気の立つ紅茶を一口。

ヴィリア「のん気にお茶会ですかあ？」

ラグ「意味はないんですけどね」

しばらくヴィリアとラグは話していたが、クレアが流れを遮った。

夜道を一人の男が、少女と手を繋いで歩いている。(後書き)

作者はたぶんガキ使を見てるでしょう。

一歩間違えれば少女誘拐である。そう見られてもおおかしくない。(前書き)

年始も休まず投稿(予約)

一歩間違えれば少女誘拐である。そう見られてもおかしくない。

クレア「…早く」

ヴィリア「ああ、すみませんねえ」

適当なものを決め、さっそく店員を呼ぶ。

その後もガールズトークというか、特にこれといった話を話すわけでもなく。

すっかり落ち着いたレストランで食事をとる3人。

ラグ「さて、そろそろ時間です」

ヴィリア「また戻ってくるんじゃないですかあ？」

ラグ「時間がありましたら戻って来ますよ」

最後の一口を飲み、まるで花びらが散るように宿を出ていった。

一度も振り返ることなく。

一歩間違えれば少女誘拐である。そう見られてもおおかしくない。(後書き)

気付いたら50,000文字突破してました。
7ヶ月くらい連載してるのかぁ…。

あと、あけましておめでとunggざいます。
他の人の小説で聞き飽きてると思いますが。

職質されることも、通報されることもなく、無事に家へと辿り着くことに成功――

俺「あー…腹減った」

ヴィリア「あらあ」

俺「なんか食わせろ…」

クレア「…」

ヴィリア「野蛮な人ですわねえ」

もう突っ込むのもダルイので、2人はこのまま放置しよう。

目だけ合わせてテーブルを見ると、ちょうど2つのお皿が置いてあるではないか。

そして食べ物だけじゃない。

お茶か何かのカップも見える。

俺「お前ら、もう食ったの」

ヴィリア「それが何かあ？」

気になることはないのだが、何か引っかかる気がする。

クレア「…」

職質されることも、通報されることもなく、無事に家へと辿り着くことに成功！

1月5日、6日は和歌山県に行ってます。

その間は予約しておきますので、ご心配なく。

三重寄りの和歌山にいます。

PSPに鹿目まどかのキーホルダー。黒のイヤホン。

それで音楽聞ける奴がいたら、たぶん作者です。

俺「じゃあ何か食いモン買って来るから、大人しくしてるよ?」

ヴィリア「注文するならお早めにどうぞ」

クレア「…部屋」

俺「先に戻るってか…。冷てえな…」

2人はレストランから出ていき、後ろ姿は見えなくなった。

風呂に行ったであろう残り香だけを漂わせて。

誰もいなくなった場所で、1人虚しくオムライスを食べる。

ふと見た机の上には、長い毛が1本落ちていた。

軽く息を吹いて、その毛を落とす。

食べ終え、部屋へと戻ろうとしたところを、少し引き返す。

床に落ちた綺麗な髪の毛である。

少女はすでに押入れのところに向かっており、俺の話なんか聞いていない。

俺「…考え過ぎか？」

もう一度観察する。

しかし冷静になって考えてみれば、銀色の髪なんて1人だけって訳じゃないし。

拾った髪を床に捨て、部屋へと戻った。

俺「…」

ヴィリア「あら、おかえりなさい」

クレア「…おかえり」

俺「何してるの？」

クレア「…ベッド」

ヴィリア「メイキングですう」

俺「俺の場所は？」

2人が指差した場所にあったのは、何の変哲もない白い普通のソファ。

「個性がないのが個性です！」って叫んでる。

少女はすでに押入れのところに向かっており、俺の話なんか聞いていない。

明日は旅行なので、投稿できません。
嘘です。予約しておきます。

玄関の鍵を閉め、少ない金を握りしめスーパーへと向かった。

俺「…」

ヴィリア「またソファーです」

クレア「…寝ろ」

な、泣いてなんかないもん！

ただちよつとだけ上を向いてるだけだもん！

涙が零れないように我慢してる訳じゃないもん！

ゆっくりとした足取りでソファーに向かい、2人に足を向けるようにうつ伏せになった。

ヴィリア「泣かなくてもいいじゃないですかあ」

クレア「…泣き虫」

ヴィリア「蛆虫」

小さな涙声で「ないてない…」と言ったつもりだったのだが、聞こえていないようだ。

玄関の鍵を閉め、少ない金を握りしめスーパーへと向かった。(後書き)

この小説は予約投稿となっております。

スーパーに着くなり半額の品ばかりをかごに入れ、素早く買い物を終える。

拗ねた状態のまま、どうやら寝てしまったようだ。

それに気付いたのは夜中だった。

布団なんてなかったはずなのに、いつの間にか俺に被せてあった。

2人は何でもないように眠っていた。

昨晚の事を思い出して少しだけ興奮したが、どうやら今日は来ないようだ。

…残念なような気持ちを抑えつつ、起きてしまったものはしょうがない。

散歩でもしようと、部屋を出た。

そうすると昔の事が蘇りそうになった。

なぜ俺はこんな世界にいるのか。

スーパーに着くなり半額の品ばかりをかごに入れ、素早く買い物を終える。(後

この時間ならたぶん家にいると思いますが、一応予約しておきました。

街路灯が多くない道を、やや小走りで帰る。

俺「…」

たぶん俺は、もともとこの世界の人間じゃない。

この世界に来て、初めて目を開けて、屋外にいた。

そこからの記憶しかない。それ以前の記憶がない。

城下町を吹き抜ける弱い風が、俺にぶつかった。

現実の、と言っても、こっちが現実って事もあるが。

ここに来る前の現実世界で、俺は…。

俺「…」

太陽は沈んで、月が出ている。

時間もあるし食欲も睡眠欲もある。

？「…」

俺「…」

月明かりに照らされ、俺の先に何かが立っている。

街路灯が多くない道を、やや小走りで帰る。（後書き）

「タオルケットをもう一度」

このシリーズって、もう公開されてないんですね…。

久しぶりにやりたかったのに。

あの鬱と感動は素晴らしい。

いつかそういうのも書いてみたいです。

キャラに感情移入させるのが、とても難しいですが…。

少女が心配という事もあるが、それ以上の心配事があった。
(前書き)

正直、前の話は勢いで書いたので、ネタがないんです。

少女が心配という事もあるが、それ以上の心配事があった。

立っていた何かは、俺が1歩近づいた瞬間に、姿をくらませてしまった。

追いかけようかとも思ったが、どこに行ったのかさっぱり分らない。

俺「…何だっただ？」

もやもやした感じが残ったが、気にしない事にした。

そういう事にしたい。

再び城下町の散歩を再開。

お祭り騒ぎの痕跡がところどころあり、ゴミなどが散乱している。

しかし、人は誰もいなく、野良犬みたいなものだけが歩いている。

俺「そりゃそうだよな。夜中だもんな」

俺「本棚だけは・・・あれだけは弄るなよ・・・！」

夜の風はまだ冷たく、体から熱が奪われていた。

そろそろ戻ろうかと思い始めたころ、夜中だというのに開いてる店があった。

やや細い道に面しているが、怪しいといった感じはしなかった。

しかし、表に看板などは置いてなく、何の店なのかは分からなかった。

俺「・・・」

恐怖心よりも好奇心。

お化け屋敷のような感覚で、その店へと入っていった。

中にいたのは老婆一人。

小さな丸いテーブルには、アロマキャンドルのようなものが置かれていた。

俺「本棚だけは・・・あれだけは弄るなよ・・・!」(後書き)

古いパソコンの中に「天使のうつわ」というフリーゲームが入って
ました。

あまりに懐かしかったので、こっちのパソコンでもDLしてハマっ
てます。

家からスーパーまでは、そんなに距離もない。

店に入ったというのに、老婆は何も話してこない。

道具を売っているようには見えなく、武器や防具を売っているようにも見えない。

もちろん外見からも内面からも、宿屋ではないことは明らか。

俺「あの…」

老婆「…」

死んでいるかのように目を瞑って、やや下を向いている。

眠っているようにも見えるが…。

だんだんと好奇心が恐怖心へと変化していた。

もしかしたら、本当に死んでいるのではないか。

後退り、店から出ようとした瞬間…。

家からスーパーまでは、そんなに距離もない。（後書き）

友人から東方のカレンダーを貰いました。
しかし、飾る場所がないという罫。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7933t/>

ロリコンな俺のダラダラ生活

2012年1月10日21時47分発行